

基調講演Ⅱ「百済僧弘済の三谷寺をさぐる」

比治山大学 名誉教授 松下 正司

1 はじめに

ご紹介いただきました松下です。今日は午前中から熱心に勉強されましたので皆様お疲れではないかと思います。午前中のお話、大変いろんなことを聞かせていただきました。もう私は話をするのではないように思うのですが、一応「百済僧弘済の三谷寺をさぐる」というタイトルで、お話しすることになっておりますので、少しお付き合いを願いたいと思います。



実は私、この題を決めまして後で後悔いたしました。なぜこんなタイトルにしたかと申しますと、今回の全体のタイトルは「古代の東アジアとひろしま」ということで白村江の戦いと寺町廃寺という副題がついています。これは主催者の方でお決めにな

まつした まさし
松下正司

1937（昭和12）年広島県生まれ。

広島大学教育学部卒業。1964（昭和39）年から奈良国立文化財研究所、文化庁に勤務。1973（昭和48）年から広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、広島県立歴史博物館に勤務。1991（平成3）年から比治山大学に勤務。現在比治山大学名誉教授。

古代寺院・古代瓦の研究並びに草戸千軒町遺跡を中心とした中世遺跡について幅広く研究。特に三次市の寺町廃寺から出土している水切り瓦の画期的な研究と、中世民衆の町・草戸千軒町遺跡の発掘調査の陣頭指揮で知られる。

主な著書に『古代史復元10巻 古代から中世へ』（共著・講談社1990）『日本歴史考古学を学ぶ（上巻）政治・経済・生活の諸相』（共著・有斐閣1983）、『古代史発掘9巻埋れた宮殿と寺』（共著・講談社1974）など多数。

られたタイトルでございますが、白村江の戦いと寺町廃寺の関係ということになりますと、寺町廃寺って何だろうと思われる方も多いのじゃないか。この寺町廃寺は現在の遺跡名でありまして、建てられた当時はこのあたりの郡名から三谷寺と呼ばれていたようです。

それでは三谷寺というのは何かとう説明が必要になってきます。そこで、もっと皆さんにわかりやすくと思いま

して「百済僧弘済の三谷寺をさぐる」というような、本当に考古学を研究するものらしくないようなタイトルにいたしました。これは大変申しわけないと思っております。

と申しますのは、百済僧弘済について新たにいろんなことがわかった、だからその話をする

のだというふうにとられると困るわけでして、私が今日お話ししようと思っておりますのは、むしろ三谷寺というものをどのように考えているのかというようなお話です。これを最初にお断りしておきたいと思います。

2 三谷寺＝寺町廃寺を考える

(1) 『日本霊異記』所載「百済僧弘済」の三谷寺

さて百済僧弘済という人につきましては、平安時代に書かれた仏教説話集の『日本霊異記』以外の史料には全く出てまいりません。それから、朝鮮半島の記録にも全く

講演の章立て ()内の数字は本書のページ番号

- 1 はじめに.....(90)
- 2 三谷寺＝寺町廃寺を考える.....(91)
 - (1)『日本霊異記』所載「百済僧弘済」の三谷寺
 - (2)寺町廃寺の研究史
- 3 寺町廃寺の発掘成果と諸問題.....(104)
 - (1)寺町廃寺と法起寺式伽藍配置
 - (2)広島県内の古代寺院の伽藍配置
 - (3)寺町廃寺の瓦積・埴積基礎の構造
 - (4)奈良の寺々の伽藍と寺町廃寺
 - (5)寺町廃寺の軒瓦の文様と系統
 - (6)唐三彩と柄香炉
 - (7)寺町廃寺周辺の関連瓦窯と古代寺院
 - (8)安芸・備後の初期仏教文化の様相
 - (9)寺町廃寺の保護・活用に向けて
- 4 おわりに-寺町廃寺は三谷寺-.....(133)

【スライド1】「講演の章立て」

贖³龜⁴命⁵放生得⁶現報⁷龜所⁸助緣⁹ 第七
禪師弘済者 百濟國人也 當¹⁰百濟亂時¹¹ 備後¹²三谷郡
大領之先祖 爲¹³救¹⁴百濟¹⁵遺運¹⁶旅¹⁷ 時發¹⁸誓願¹⁹言²⁰ 若平²¹
還卒²² 爲²³諸神祇²⁴ 造²⁵立伽藍²⁶ 遂免²⁷災難²⁸ 即請²⁹禪
師³⁰ 相共還來³¹ 造³²三谷寺³³ 其禪師所以造立伽藍³⁴ 多諸³⁵
寺³⁶ 道俗觀之共爲³⁷欽敬³⁸ 禪師爲³⁹造⁴⁰尊像⁴¹上⁴²京⁴³ 賣⁴⁴
財既買⁴⁵得⁴⁶金丹等物⁴⁷ 還到⁴⁸難破之津⁴⁹ 時海邊人賣⁵⁰大
龜四口⁵¹ 禪師勸⁵²人買⁵³而放之⁵⁴ 即借⁵⁵人舟⁵⁶ 將⁵⁷童子二
人⁵⁸共乘度⁵⁹海⁶⁰ 日晚夜深⁶¹ 舟人起⁶²欲⁶³行⁶⁴到備前骨嶋之
邊⁶⁵ 取⁶⁶童子等⁶⁷擲⁶⁸人海中⁶⁹ 然後告⁷⁰禪師⁷¹云⁷² 應⁷³□⁷⁴入⁷⁵
入海⁷⁶ 師雖⁷⁷教化⁷⁸賊猶不⁷⁹許⁸⁰ 於⁸¹茲發⁸²願而入⁸³海中⁸⁴ 水⁸⁵
及⁸⁶腰時⁸⁷ 以⁸⁸石當⁸⁹脚⁹⁰ 其曉見之⁹¹ 龜負之矣⁹² 其備中海
浦海邊⁹³ 其龜三領而去⁹⁴
疑是放龜報⁹⁵恩乎⁹⁶ 于⁹⁷時賤等六人⁹⁸ 其寺賣⁹⁹金丹¹⁰⁰ 檀越
先過量¹⁰¹價¹⁰² 禪師後出見之¹⁰³ 賤等垢然¹⁰⁴ 不知¹⁰⁵退進¹⁰⁶ 禪
師憐愍¹⁰⁷不加¹⁰⁸刑罰¹⁰⁹ 造¹¹⁰佛殿¹¹¹塔供養¹¹²已了¹¹³ 後住¹¹⁴海邊¹¹⁵
化¹¹⁶來人¹¹⁷ 春秋八十有餘而卒¹¹⁸ 畜生猶不¹¹⁹忘¹²⁰恩返¹²¹報恩¹²²
何況¹²³義人而忘¹²⁴恩乎¹²⁵

配付資料22頁右下 『日本霊異記』上巻の原文（日本古典文学大系 岩波書店刊）より

出ておりません。これは資料の22頁の右下に原文を載せておきましたが、『日本靈異記』の上巻の第七に「亀の命をあがないて放生し、現報を得て亀に助けられしところのえにし」という説話が載っています。『日本靈異記』は、一般には『靈異記』だと言っておりますが、正式な名前は『日本現報善惡靈異記』（以下では『靈異記』と省略。）という書物です。そのなかに、「百濟僧の弘濟」でありますとか「三谷寺」の名前も出てくるわけで、今日これから私がお話いたしますのは、三次にあります寺町廃寺という寺を発掘して、あるいは寺町廃寺から出ました瓦を研究して、この寺町廃寺こそ三谷寺だというふうに私は思っているわけですが、この話をさせていただきたいと思っております。

この靈異記の話、先ほど亀田先生のお話がございまして、細かく申すことはもうないわけですが、資料22頁の右下（本書の91頁に掲載）を見ていただきたいと思います。『靈異記』の原文はこういう風に漢文体でございます。これを読み下し文にいたしますと、これは岩波書店の『日本古典文学大系』から転載させていただいたものですが、今、映っているもの【スライド2】でございます。実はこのお話は同じ

『日本靈異記』

『日本靈異記』上巻（日本古典文学大系 岩波書店刊）より

第七 龜の命を贖ヒテ放生し、現報を得て、龜に助けらるる縁

禪師弘濟は、百濟の國の人なり。百濟の亂るる時に當りて、備後國の三谷の郡の大領の先祖、百濟を救はむが爲に軍旅に遣さる。時に誓願を發して言はく「若し、平に還り來らば、諸神祇の爲に伽藍を造立せむ」といふ。遂に災難を免る。即ち禪師を請けて、相共に還り來る。三谷寺は、其の禪師の造立する所の伽藍なり。道俗觀て共に欽敬を爲す。禪師尊像を造らむが爲に京に上り、財を賣りて既に金丹等の物を買ひ得て、還りて難破の津に到る。時に海邊の人、大きな龜四口を賣る。禪師、人に勸めて買ひて放てり。即ち人の舟を借り、童子二人を將て、共に乘りて海を渡る。日晚し、夜深けて、舟人欲を起し、備前の骨嶋の邊に行き到り、童子等を取りて、海の中に擲り入れ、然して後に禪師に告げて曰はく「速かに海に入る應し」といふ。師默化すと雖も、賊猶許さず。玆に願を發して海の中に入る。水腰に及ぶ時、石の脚に當るを以て、其の曉に見れば、龜の負へるなり。其の備中の海浦海邊にして、其の龜三たび領きて去る。疑はくは、是れ放てる龜の恩を報ずるか。時に賊等六人、其の寺に金丹を賣る。檀越先に運りて價を量り、禪師後に出でて見る。賊等惶然、退進を知らず。禪師憐愍びて刑罰を加へず、佛を造り、塔を嚴りて、供養すること已に了はりぬ。後には海邊に住み、往來の人を化す。春秋八十有餘にして卒りき。畜生すら過恩を忘れずして恩を返報す。何に況むや。義人にして恩を忘れむや。

【スライド2】『日本靈異記』（読み下し文）

ような話が『今昔物語集』という本にも出ています。『靈異記』の方は平安時代の初めごろに薬師寺の景戒というお坊さんが全国の仏教にかかわる説話を集めた仏教説話集ですが、それをもっと広く集めたのが資料22頁左下（本書の93頁に掲載）の『今昔物語集』で、こういう風に漢字と仮名で書かれたもので、これは非常に読みやすいわけですが、これも仏教説話集でございます。ただ『今昔物語集』はだれが編纂したのかというのはわかっておりません。編纂されたのは平安時代の終わりごろではないかと推定されています。つまり『靈異記』は平安時代の初め、『今昔物語集』は平安時代の終わり頃のものということです。この『今昔物語集』は、インドや中国、そして日本の仏教説話を集めたもので、ぜひ機会がありましたらお読みいただくと大変おもしろい話がたくさん載っています。資料22頁右下の『靈異記』の第7話と左下の『今昔物語集』の第30話を見比べてみると、だいたい一緒の話なのですが若干違うところもあるのですね。といいいますのは、恐らく『今昔物語集』のこの話は『靈異記』をもとにして書かれた可能性があるわけですが、『靈異記』では「禅師弘濟」と記して

龜、報伯濟僧弘濟恩語第三十

今昔、備後國、三谷郡に住人あり、其ノ部ノ大領ノ先祖也。其ノ人、百濟國ノ蝦夷ノ時ニ、事縁有リ依テ、彼ノ國ヲ助ガシ、數ノ僧侶ヲ引見シテ、彼ノ國ノ行キリ而ノ間、助ケ得ル事不能シ。嘗テ皆失レテ、獨リ有リ。此ノ國ニ返リ来リ、年未タ終テ返ル事ヲ不得レバ、本國ヲ懸ヒ悲シテ、泣キテ願フ。我レ、思ヒノ如ク本國ニ返リ得ム。其ノ所ニ大ニ伽藍ヲ造テ、佛菩薩ノ像ヲ顯シ奉リ、願シテ有リ。其國ニ僧有ケリ、名ヲ弘濟ト云フ。彼ノ人、其國ニ此ノ弘濟ノ得意、互ニ後世ノ事ヲ成シテ海ノ間ニ年来テ經テ、送ニ此ノ國ニ返ル時、彼ノ弘濟相ト具シテ、此ノ國ニ來テ、此ヲ本ノ如ク備後ノ國ニ有ケル願ノ叶ヘル事ヲ喜デ、忽チ大ナル寺ヲ其ノ所ニ造ル。弘濟相ト共ニ此ヲ營テ、佛ノ像ヲ造リ、金買ムガ為ニ、弘濟ニ多ノ財ヲ持テ、京ニ上リ、弘濟京ニ上リ、思ヒノ如ク金買ヒ得テ、返リ下ノ間、難波ノ津ニ海人有リ大ナル龜四捕テ教トム高ルヲ、弘濟此レヲ見テ哀シノ心ヲ發シ、龜ヲ買テ海ニ放シ入レリ。

其ノ後、船ヲ出シテ行キ、備前國ノ青嶋ノ邊ニ至リ、日暮方ニ海賊ニ值リ、海賊、弘濟ノ船ニ乗リ移テ、弘濟ノ具ヲ奪テ一人ヲ取テ海ニ投入レリ。其ノ後、弘濟ニ云テ、「汝早海ニ入リ、不入バ取テ投入レム」云ヘバ、弘濟手ヲ摺リテ云ヘバ、海賊不用テ、然レバ弘濟心内ノ願ヲ遂ゲテ心ヲ海ニ入リ、海賊、船ノ物ヲ皆取レバ、買テ所ノ金ヲ皆取テ、弘濟海ニ入リ、水響ノ程ニ足ニ石ノ様ノ物ヲ踏ミ、此ヲ終夜海ニ立テ、夜ニ腹ヲ此ノ踏ミ物ヲ見レバ大ナル龜ノ甲ヲ踏ミ、有所見レバ備後ノ浦ノ海邊也。此ヲ見レバ、奇異ノ事無限シ。夜前海賊ニ値シ、所ノ備前ノ青嶋ノ邊也。只今有所見レバ備後ノ浦也。一夜ノ經ニ既ニ一國ヲ過テ来リ、「幾ノ程ニ此ニ來」思フニ、奇異ノ事無限シ。其ノ際ニ上ニ思フ様、「一日我買テ海ニ放シ入レシ龜ノ、我レ恩ヲ報テ助ケル也ト」思ヒ、哀レシ貴シ。

其ノ三谷ノ家ニ返リ行キ、此ノ事ヲ語レバ、家主此レヲ聞テ云テ、「海賊ニ値テ財ヲ被奪ルハ常ノ事也。但シ命ヲ存テ力ハ備ヘ恩ニ依テ也」ト喜ビ、貴テ有リ。其ノ家ニ人來テ、金買テ弘濟出テ見レバ、彼ノ骨嶋ニ此ノ龜ノ海賊六人有リ。海賊弘濟ヲ見知リ、奇異ノ思ヒテ海ニ氣色現シテ、更ニ物不云テ、而ルニ、弘濟、海賊ノ事ヲ人ニ不云テ、金買テ直ニ與ヘテ買ヒ取テ海賊ハ、「我等ハ今限ゾ」思フ。弘濟物不云テ、金買テ取テ止リ、喜シト思テ返テ、其ノ後、堂理ヲ佛道ヲ奉テ供養シテ、此レ三谷寺ト云テ、弘濟、後ニ海邊ニ有リ世邊ノ人々其ノ利益ヲ有ケル。遂ニ年八十餘ニ失レリ。

龜、人ノ恩ヲ報ズル事今ニ始メ、天竺ノ靈且リ始メ此ノ朝マダ此ナリ有ナムト語リ傳ルヘトヤ。

配付資料22頁左下 『今昔物語集』 卷第十九（日本古典文学大系 岩波書店刊）より

います。禪師とは禪宗のお坊さんという意味ではございません。当時のお坊さんだというふうに見ていただけたらいいと思いますが、『今昔物語集』では弘済は百済の僧（お坊さん）だと書いてある。そしてどちらも、百済が滅亡するときに備後の国の三谷郡の大領の先祖が百済に出兵し、戦乱が終わった後お坊さんを連れて三谷郡に帰って、この三谷寺を造ったという話になっています。

この前半の部分のお話は、史料とは言えないかも知れませんが、日本の古代の寺院が造られる状況を考えるのときに参考になるお話です。それから物語の後半のところは、備後の三谷郡から難波の津を通して都へお寺や仏像を造る資材を買いに行くわけですが、その資材を買い整えて、難波の津から船に乗って帰るときに亀を助けて、その亀に助けられるという話でございます。

後でまた『今昔物語集』を読んでいただければと思いますが、この話の中で先ほど亀田先生の話の中に出た備中の骨島、この骨島のあたりで難波の津から船に乗って帰る途中の弘済というお坊さんは海賊に襲われて海に投げ込まれて、資材を全部とられてしまいます。弘済は海に投げ込まれてしまったのですが、海に入ったところで足の下に大きな岩のようなものがあって、その岩に立っていたら備後の海岸に着いたと書かれているわけです。これは難波の津で弘済が助けた亀が恩に報いたという話になっているわけですが、亀が人間を助ける話というのはこれ以外にも皆さん御承知の浦島太郎の話にもありますし、基本的には中国の説話の中にもたくさんあるわけです。インド、中国、東南アジアに広く伝わる話の中に亀の話が出てくるわけですが、この話自体は大変荒唐無稽な話ですね。亀が人を背中に乗せて連れ帰ってくるというのは、当然おとぎ話ですが、この物語ではその後、その弘済を襲った海賊が、こともあろうか弘済の三谷寺へ奪った資材を売りに来るという話になっていて、ここで弘済というお坊さんは、その悪い海賊をとがめないで売りに来た資材を買い取って許してやった。そして最後は、仏を造り塔を建てて供養する、という話になっています。

それからもう一つ、『靈異記』と『今昔物語集』で記述が違ってきますのは、『靈異

記』では亀に助けられた弘済は、備中の浦（浜辺）に着いたと書かれています。さっきの亀田先生の話にもありましたが、弘済は備中の浦に着いて備中から備後の北部、三谷郡まで帰ったのだなということになるわけです。ところが、『今昔物語集』では弘済は備後の浦の海のほとり、つまり備後へ着いたと書かれている。そうすると、『今昔物語集』の方が辻褄が合うんです。しかしどっちが正しいかというと、それはわかりません。恐らく『今昔物語集』の作者が、備中に着いて備後に帰ったというのでは話が合わないから、ここの備中を備後の浦に変えたのかもわかりません。

それから最後のところですが、『靈異記』では仏像を造って塔を建てたと書いてありますが、今昔物語では、塔ではなくて「堂を建て仏を造り奉りて供養する」となっています。堂というのは恐らく金堂だと思いますけれども、こういう風にちょっと違うところもあるわけです。それからもう一つ、『靈異記』では最初に三谷郡の大領（長官）の先祖が出兵するときに、もし私が無事に帰れたら諸神祇のためにお寺を建てるということを誓願して出てゆくことになっていますが、『今昔物語集』ではそうではなくて、戦に負けてもすぐには帰れなかったという話になっていて、このときに「ああ、帰りたいなあ」と思いながら「もし帰ったら大きな寺をつくろう」と思い立つ、そうしているうちに百済で弘済というお坊さんと懇意になって、一緒に帰ってくるという話になっています。こうした細かな点で『靈異記』と『今昔物語集』では、相違点があります。

こうした亀の恩返しという仏教説話的な話とは別に、この物語で重要な点は、実は古代の寺院がどのような契機で造られ、またどのような具体的な段取りで造ったのだろうか、ということが推測できることです。つまりお寺を造るときに、お坊さんがわざわざ都まで資材を買いにいったことや、そしてこの資材を買うときにはもちろんお金が必要になるわけですが、このお金を出したスポンサー（^{だんおつ}壇越）がおりまして、これが恐らく郡司に当たる方だと思います。それがお金を出してお坊さんがわざわざ都まで行って資材を買って帰るというように、地方寺院が創建される際の具体的な様子

を考えるときに、この物語は大変参考になる史料になるわけでございます。

それからこのお寺が造られた大きな契機となった白村江の戦いの前後の様子については皆さんに見ていただきやすいようにと思って、年表風のものを資料の22頁の上段に示しています。特に百済との関係を示した年表を上段の真ん中（本書の96頁に掲載）に載せておりますので、その天智2年（663）のところを見ていただきますと、天智2年3月、上毛野君稚子、阿倍比羅夫らに命じて兵2万7千人をもって新羅の国に派兵したことや、あるいは8月27日、28日に日本と百済の連合軍が唐・新羅軍と白江（白村江）で戦い、日本と百済の連合軍が惨敗して百済が滅びる。そして9月には日本軍が百済の遺民とともに帰るというような流れがお解かりになるかと思います。この年表は黛弘道編『年表 日本歴史1』（1980筑摩書房）から抜粋させていただきました。

それからその左側の年表（本書の97頁上段に掲載）は、鬼頭清明著『白村江』（1981教育社）という新書版の本に掲載されている年表ですが、日本と中国・朝鮮のことが対比してありますので、これをご覧いただいたらわかりやすいかと思います。

662~668

- 天智元年（六六二）壬戌 閏七
- 一・百済の将鬼室福信に兵器・衣料・種粳等を送る（紀）
 - 三・唐・新羅軍、高句麗を討つ、高句麗、日本に救援を求め、唐・新羅、征討中止（紀）
 - 五・阿曇比羅夫、余豊璋を福信のもとに送り、百済の王位につかせる（紀）
- 天智二年（六六三）癸亥
- 二・鬼室福信、唐の俘虜を献じる（紀）
 - 三・上毛野君稚子・阿倍比羅夫らに命じて兵二万七千を率いて新羅征討に向かわせる（紀）
 - 六・百済の王豊璋、鬼室福信を殺す（紀）
 - 八・元、元日本・百済軍、唐・新羅軍と白江（白村江）に戦い惨敗、百済滅び、豊璋は高句麗に逃亡（紀・旧唐書・三国史記）
 - 九・日本軍、百済の遺民とともに帰国（紀）
- 天智三年（六六四）甲子
- 三・大海人皇子、甲子の改革令を宣布、新冠位二十六階を制定、氏上を定め、民部（部曲）・家部を諸氏に与える（紀）
 - 五・唐の百済鎮將劉仁願、郭務儼らを遣わし上表貢獻、朝廷は入京を許さず（紀・善隣国宝記所引海外国記）
 - 三・唐使を筑紫より返す（紀・善隣国宝記所引海外国記）
 - この年 対馬・壱岐・筑紫等に防人・烽を置き、筑紫大宰府防衛のため前面に大堤を築き水を貯えて水城という（紀）
 - 没五・大臣蘇我連子
- 天智四年（六六五）乙丑 閏三
- 二・百済の百姓男女四百余人を近江国神前郡に移す（紀）
 - 八・百済の遺臣に長門国の城（山口県下関市）・筑紫国の大野城・櫟（基肆）城を築かせる（紀）
 - 九・唐使劉德高・郭務儼ら来朝、入京を許される（紀）
 - 二・唐使、帰国（紀）
 - この年 守君大石・坂合部連石積らを唐に派遣*第五次遣唐使（紀）
 - 没三・三間人皇太后（孝德皇后） 三・三僧貞慈（三・鎌足長子）

西暦	日 本	中 国・朝鮮
六一八		唐王朝成立、高祖(李淵)即位。
六二六		唐太宗即位。
六二九	舒明天皇即位、宣皇女皇妃となる。	
六三〇	遣唐使派遣。	
六四二	皇極天皇(聖武)即位。	唐、突厥の頡利可汗を破る。
		高句麗蓋蘇文、王建武を殺害。宣蔵を擁立。
六四三	山背大兄王、蘇我入鹿によって滅ぼされる。	百濟、新羅の大耶麻呂以下四十余城を占領。
六四四		太宗「征高麗の詔」を發布。
六四五	蘇我入鹿らクーデターにより打倒される。百濟、任那の領を貢納。	唐の高句麗遠征軍出発。
六四八		新羅、耽羅の王。
六五四	齊明天皇即位。	唐高宗、百濟を攻撃、泗水城陥落。高句麗遠征再開。
六六〇		
六六二	百濟派遣軍出発、中大兄執政。	
六六三	日本書、唐・新羅軍に白村江で敗北。	
六六五	水城をさぐく。	
六六七	近江大津宮へ遷都。	
六六八		高句麗、唐・新羅連合軍によって滅亡。
六六九		新羅、対唐戦争を開始。
六七二	壬申の乱。	新羅、朝鮮半島を統一。
六七六		

配付資料22頁上段左 「鬼頭清明『白村江』(1981 教育社)より」

また右側の縦に並んだ一覧表(本書の97頁下段に掲載)は、白村江の戦いに日本のどこあたりの人たちが動員されたのか解る表と思って載せております。先ほどの亀田さんの話にも、上毛野、つまり群馬県あたりの人も行っただけという話も出ましたけれども、これはその一覧でございます。これをご覧いただいたらわかるのですが、表の一番左側には国名が書いてあります。例えば、一番上には駿河の

国名	郡名	出典	人名	備考
駿河		齊明7・足歳条		船をつくらせる
甲斐	山梨	古屋家家譜	大伴山前連御守	少領、唐で病没
常陸	石城	風土記香島郡条		*「淡海之世」に石城でつった船が香島郡に漂着
陸奥	信太	慶雲4・5・癸亥条	生王五百足	四十余年後に帰国
但馬	朝来	栗鹿大神元記	神部直根閉	帰国後、大領に
播磨		風土記讃谷郡条	国守道守臣	*官船をつくる
備中	下道	風土記逸文		邇磨郡で軍士2万人を徴発
備後	三谷	日本霊異記	三谷郡大領の先祖	百濟の僧侶を伴って帰国
讃岐	郡賀	慶雲4・5・癸亥条	錦部刀良	四十余年後に帰国
伊予	風速	持統10・4・戊戌条	物部素	帰国・追大式授与
	越智	日本霊異記	越智郡大領の先祖	帰国後、立評、小市国造か
筑前	早良	天武13・12・癸亥条	筑紫三宅連得許	帰国
筑後	山門	慶雲4・5・癸亥条	許勢部形見	四十余年後に帰国
	上妻	持統4・9・丁酉条	大伴部博麻	軍丁。30年後に帰国
		持統4・10・乙丑条		
		天智10・11・癸卯条	筑紫君薩夜馬	帰国。筑紫国造か
豊前	宇佐	天智10・11・癸卯条	韓嶋勝姿婆	帰国。宇佐の有力豪族か
肥後	皮石	持統10・4・戊戌条	壬生諸石	帰国・追大式授与
不詳		天智10・11・癸卯条	布師首磐	帰国。越中国射水郡、土佐国安芸郡に布師郷がある
		天武13・12・癸亥条	猪使連子首	帰国
		持統4・10・乙丑条	土師連富杆	天智10・11・癸卯条で帰国か
			永連老	
			弓削連元宝兒	

配付資料22頁上段右 「森公章『白村江』以後(1988 講談社)より」

国で、斉明7年に船を造らせた、つまり百済へ行くための船を造らせたことがわかります。そしてその少し下の欄に備後の三谷郡大領の先祖が百済の僧侶を伴って帰国するというのが『靈異記』に記されているのがわかります。この一覧表を見ますと、かなり広範囲の地域から動員されているようで、甲斐や常陸のほか陸奥というのもありますね。かなり大規模に日本国中から動員されたということが、この表でわかっていただけるのではないかと思います。

この中で瀬戸内海沿岸から北部九州の国々の人が一番たくさん出かけていると思いますけども、それは史料や物語に記録されたものだけではなく、備中では先ほどの亀田さんの話にもありましたが2万の人が集まった逸話も残っている。それから讃岐や伊予なども史料に記録されています。では、ここに出ていない安芸の国の人に行かなかったのか、あるいは備前の国の人…ということになるかも知れませんが、恐らく瀬戸内海沿岸の国々からはたくさんの人が出兵していったのだろうと推測されます。先ほどの伊藤さんの話の中の最後に、司馬遼太郎さんの書いたものが出ておりましたが、まさにああいう状況で陸奥の国や富士山が見える国々など日本中から出兵したのだということが推測できるわけです。また、九州では筑前、筑後、豊前、肥後など、朝鮮半島へ近いところからも当然出かけていますし、九州のもっと南のほうからも出かけていると思います。こういうことを頭に入れていただきまして、中国山地の真ん中あたりになります三次の寺町廃寺を創建した豪族もその中に加わっていたことを考えながら、お話を進めていきたいと思います。

（２）寺町廃寺の研究史

私の今日のお話の中心になる寺町廃寺がございます三次市の東部あたりは、昔は三谷郡と呼ばれております。三谷郡にあります寺町廃寺というお寺を三谷寺ではないかと考えているわけで、この考え方は別に私が全く新しく言ったわけではございませんで、古くから言われております。

一番古いところは、私が見たものでは明治時代に村岡良弼さんという方が『日本地

理志料』(1903)という日本全国の地誌を書いた本の中で、寺町廃寺が三谷寺ではないかということを書いています。これが一番早いのではないかと思います。その後、いろんな方々が少しずつ調べを進めておられまして、例えば、昭和15年には猪原薫一さんが、三谷寺は寺町廃寺ではないかということを書いておられます。当時はなかなか研究ができない時代だったと思いますけれども、証明の仕方はもう一つです。それから寺町廃寺は昭和12年でしたか、県の史跡になっているわけですが、その後昭和17年に県の史跡指定の解説書を書いた織田三郎治さんが寺町廃寺について書いております。若干考え方の違いはあるわけですが、これは大変立派な論文でございました。あの当時これだけのことを書かれる方がおられたのかと驚いたのですが、大変立派な論文を書いておられます。寺町廃寺が『日本霊異記』に記された三谷寺であるとされたのは、三谷郡で古代の寺はこの寺しかないことが主な論点でした。

さて、私と寺町廃寺の出会いについて少しお話をしておきますと、この前、福山の県立歴史博物館でも話をしたのですが、実は今年は、私たちが長年関わりました草戸千軒町遺跡の第1回目の発掘調査、亡くなられた村上正名先生が中心になって発掘調査をされたのですが、それからちょうど50年目に当たります。その発掘調査には私がちょうど大学を卒業して尾道の中学校の教諭になったばかりの頃に参加いたしました。あれからもう50年も経ち、頭も白くなり、足腰も弱ってきても無理ないなあとと思っているわけです。私がこの寺町廃寺の瓦のことに興味を持つようになりましたのはまだ学生のときに、広島大学で考古学をしておられた潮見浩先生と一緒に三次の古墳の調査のお手伝いについて行きに、三次で郷土史を盛んに研究しておられました鶴殿治雄さんでありますとか滝谷章さんでありますとか、そういう方たちと一緒に寺町廃寺に立寄りました。そうしましたら、今史跡の説明看板が立っているあたりの少し後ろの方が切通し状の道になっておりますが、その崖面に、今では草が生えて全くわかりませんが、私が学生のころに行きましたときには、瓦がたくさん堆積しているのがよく見えました。そこを見ておきますと、その中に軒丸瓦が1点あるのが見えました。今

で言うと文化財保護法違反になるのですが、その当時のことですから、その軒丸瓦を抜いて帰ったのですね。みなさん今そういうことをしちゃいけませんよ（笑）。そのときの軒丸瓦をよく見ると、瓦当面の下端が三角形に尖ってしまっていて、これはおもしろい瓦だなあと大変興味を持ちました。

そうしているうちに、私は尾道で3年ほど教諭をした後、昭和39年から奈良国立文化財研究所で平城宮の発掘調査などをするということで教諭をやめて奈良へ移りました。奈良へ行きましたら、もちろん平城宮の発掘調査でありますとか、薬師寺や法隆寺の発掘調査でありますとか、そういうことをやりまして、そこでたくさんの瓦、それこそ何十万点という瓦が平城宮では出てくるわけですが、その瓦の整理をやりながら、瓦というものは非常におもしろいものだたと興味をもったわけです。

しかしそうやってたくさんの奈良の都の瓦を見ても、あるいは本を調べても、この寺町廃寺のように瓦当面の下端が尖った瓦というのはございません。それで、これは大変珍しい瓦だということに気づきまして、寺町廃寺の瓦の本格的研究に取り組み始めました。奈良から広島に時々帰っては三次へ行って、寺町廃寺の近辺の個人の方が持っておられる瓦や、市役所や学校などに保管されている瓦などを見せていただき、拓本をとったり、写真を撮ったりしておりました。それをまとめて昭和44年だったと思いますが、考古学雑誌に「備後北部の古瓦」という題で、寺町廃寺を中心とした備後北部の古代寺院跡から見つかった瓦の研究成果を発表しました。そのときに、やはりこんな特異な瓦を造った中心的な寺院である寺町廃寺は、これは『日本霊異記』に登場する備後の三谷寺の可能性が非常に高いのではないかというふうに思ったわけです。このときには、可能性が高いということを指摘しましたが、三谷寺につきましては、『日本霊異記』の説話の中に三谷寺という名前で登場しておりまして、それは三谷郡の三谷寺、つまり郡の名前をつけたお寺ということになる。全国的に郡の名前がついた寺院というのは幾つかありますが、それが古代の創建時からそのまま続いてきた名前かどうかはわからないわけです。しかし、三谷寺の場合は平安時代の『日本霊

異記』にそう書いてあるわけですから、かなり古い時代から三谷寺と言われておった可能性が高い。もしそうであれば、古代の郡の名前のついたお寺だから郡寺、郡の寺ということになります。私がこの論文を書きました当時は、備後の北部では各郡に1つしか寺跡が見つかっておりませんで、大体一郡一寺的な様相を示しているというふうな理解でおりました。これは後で、若い人たちからあれは違うのではないかという意見が出されるようになります。それは後に寺町廃寺のすぐ近くで上山手廃寺が見つかったためですが、このことについては後でお話しすることとします。

ところで、郡に1つしかお寺がない場合は、常にお寺の名前にその郡名がついているかという、必ずしもそう言えない例もあります。【スライド3】の左側に今の広島県の郡名を安芸と備後の国に分けて示したのがあります。郡名の右側には小さな漢字で郷名が書かれています。実は安芸高田市吉田町の明官地廃寺で大変おもしろいものが出てきました。というのは、午前中の話でもちょっと出ましたけれども、古

安芸・備後の郡名と郷名

安芸・備後両国の郡・郷名			
国名	郡名	郷名	名
安	沼	田茂	今有
	賀	安	有
	佐	伯	有
	山	高	有
芸	高	宮	有
	田	田	有
	田	田	有
	田	田	有
備	安	郡	天
	深	津	家
	神	石	天
	津	可	家
後	沼	限	天
	品	治	家
	草	田	天
	甲	叔	家

安芸・備後両国の郡・郷名
後藤陽一『広島県の歴史』（1972
山川出版）より



明官地廃寺の文字瓦



「高宮郡 内部寺」銘の平瓦
『明官地廃寺跡』第3次概報（1990 広島県
立埋蔵文化財センター）より

【スライド3】「安芸・備後の郡名と郷名」

代の高宮郡にあたる明官地廃寺というお寺がございまして、20年ほど前に発掘調査をいたしましたところお寺の名前を彫り込んだ瓦が出てきました【スライド3の右側】。これは平瓦なのですが、その凸面（裏面）に、文字が彫ってあります。写真と拓本で示していますが、「高宮郡内部寺」と書かれています。部は略字で「ア」のように書かれていますけれども、郡の名前とお寺の名前が書かれている大変貴重な瓦が見つかりました。そこで左の郡・郷名一覧を見ていただきますと、安芸の国の高宮郡の郷の1つに内部郷というのがあります。そうするとこれは古代の高宮郡の内部郷の寺だということになります。問題は「高宮郡の内部寺」なのか、「高宮郡内部の寺」なのか、これが出土しましたとき、いろいろな解釈も出されました。私はどうも寺の字が、少し左に寄っていて、そして少し下に下がっているのも、もしかしたら「高宮郡内部」で一旦切れて、「寺」は単独解釈すべきじゃないかなどと思ったのですが、多くの方は「高宮郡内部寺」という一連の文字として解釈して、内部寺というのが寺の名前とみえています。とすると、高宮郡の高宮寺でなくて内部郷の郷名のついた内部寺ということになるわけですし、郡名ではなく郷名を寺名とした郷のお寺（郷寺）があったということになります。

このことについて畿内の方の研究では、藤沢一夫さんという大変有名な寺院の研究者が言っておられますけれども、畿内の先進地域では郷ごとにお寺がつくられている。郡ごとじゃなくて郷ごとにもお寺がつくられていた可能性があるということを書いておられます。内部寺の例も、もしかしたらそういうことを証明するようなものかも知れませんが、そうすると、こんなにたくさん郷がある広島県にはもっとたくさんお寺の跡が出てもいいわけですね。しかし、それはいいわけですし、1郡でせいぜい1寺か2寺ぐらいしかないというのが現状です。そうしますと、これはもしかしたら、高宮郡のお寺であったとしても、一般的な郡名を使わなかったお寺があったと考えることもできるわけです。あるいは私は、高宮郡内部の寺という解釈をとれば、もしかしたら高宮郡内に別に高宮寺というのがあったと考えることもできるのではないかと考えています。

さて、ここで安芸と備後の古代寺院の位置関係を見ておきますと、安芸と備後の境は、だいたい広島県のほぼ中央を東西に分割した線になりますが、備後のお寺は備後の南部に集中するものと北部のものが、かなり対極的に分かれる様相を示しています【スライド4】。安芸では西部と東部、それから北部というようになりかなり散在的な在り方を示しています。こういう地理的な分布の特徴を見ておいていただきまして、私が三谷寺と考えた理由につきまして、これから述べていきたいと思います。私は最初、寺町廃寺から出土した瓦を研究したときにはそこまで強くは思わなかったのですが、発掘調査をした成果などからはまさしくこれが三谷寺であるという感じを強くしました。この寺町廃寺については大変興味をもっておりまして、何としても発掘したいなあと思っておりまして、ちょうど30年ほど前、地元から寺町廃寺を国の史跡に指定したいという要望もありまして、三次市の教育委員会と私どもの草戸千軒町遺跡調査研究所が協力しまして足掛け4年ほど発掘調査を実施しました。発掘調査いたしましたら、かなりいろんな成果がございました。その成果をもとにして、私は報告書のまとめではかなり思い切って、三谷寺の可能性が大きいということを書いたわけですが、これについては、本当に三谷寺かというような批判もあります。これからお話ししたいと思いますが、私が今日お話をする論点の一つは、寺町廃寺を発掘調査して、どういうことがわかったのか。もう一つは、それまでの瓦の研究に発掘調査の成果を加えて、以前にもまして強く寺町廃寺を三谷寺であると考えようになった理由などについてお話ししたいと思います。瓦の研究を通して考えた寺町廃寺の年代推定などの細かな点なども織り交ぜて、以上の二点を中心にお話を進めていきたいと思います。

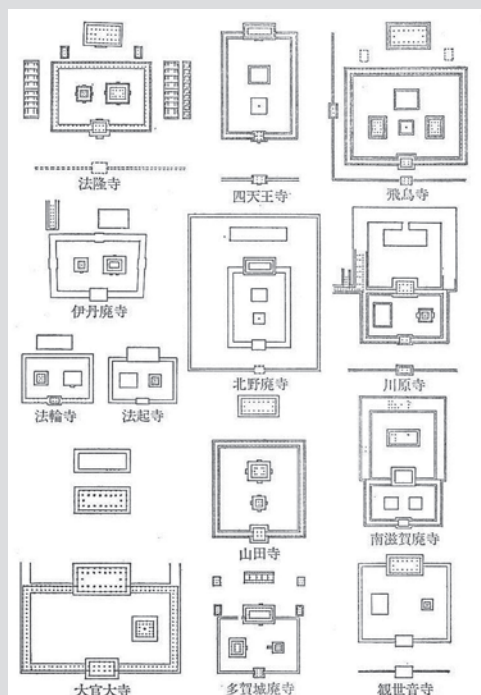


【スライド4】「安芸・備後寺院跡分布図」

3 寺町廃寺の発掘成果と諸問題

(1) 寺町廃寺と法起寺式伽藍配置

寺町廃寺は、発掘調査の結果、法起寺式の伽藍配置のお寺であることが判明しています。法起寺というのは奈良・斑鳩の法隆寺の北に法起寺というお寺があり、一般に「ほっきじ」と言っておりますが、奈良県では「ほうきじ」と呼ぶそうで、バスの停留所には仮名で「ほうきじ」と書いてあります。【スライド5】の右側が法起寺式の伽藍配置をもつ典型的なお寺の図面ですが、先ほどの亀田さんのお話でも、朝鮮半島の寺院の伽藍配置が出ておりましたが、【スライド5】の左側は日本の代表的な古代寺院の伽藍配置を示しています。山田寺式の場合は、中門を入れて塔と金堂が一直線に並ぶもので回廊が囲んでいます。講堂は回廊の外側にある。これによく似た四天王寺式の場合、回廊が講堂の両側に取り付くようになります。ここが山田寺式と若干違うところです。



主要寺院の伽藍配置

『日本歴史考古学を学ぶ(中)』(1986.2 有斐閣)より

主要寺院の 伽藍配置



山王廃寺(群馬県)の法起寺式配置

『山王廃寺』～平成21年度調査報告書～
(2011.2 前橋市教育委員会)より

【スライド5】「主要寺院の伽藍配置」

それから飛鳥寺式は、中門を入れて塔があって東の金堂、西の金堂、中の金堂というように、一塔三金堂という特異な形式です。それから川原寺式は、中門を入れて東側に塔があって西側に棟を南北にした金堂があり、正面に中金堂、その奥に講堂があるという形式で、中金堂と講堂が南北に並ぶのは奈良の大仏でおなじみの東大寺式などとも共通しています。

そしてみなさんが一番よくご存じなのが、この法隆寺式でしょう。法隆寺は中門を通って境内に入りますと右側（東側）に金堂、左側（西側）に塔がある。今の法隆寺は本来の形から少し変形されているのですが、本来は中門から出た回廊が塔と金堂を囲んで閉じていて、講堂は回廊の北側の外にありました。皆さんが、今法隆寺に行きますと、回廊が北に拡張されて講堂に取り付くように変形されていますので、中門を入ったら、塔と金堂、その向こうに講堂が直接見られるようになっています。

こういうふうに四天王寺式でありますとか、あるいは飛鳥寺式であるとか、あるいは法隆寺式であるとか、考古学者が勝手な名前をつけているのですが、その中に法起寺の伽藍配置を典型とする法起寺式というのがあります。法起寺と法隆寺の伽藍配置は東西が全く逆でございまして、法起寺式は中門を入れて右側（東側）に塔、左側（西側）に金堂がある。そして、講堂へ回廊が取り付くようになっています。こういうのを法起寺式伽藍配置と呼んでいます。寺町廃寺を発掘調査いたしましたら、法起寺式の伽藍配置と非常によく似ているということが判明して、寺町廃寺は法起寺式伽藍配置であるということが確定しました。

全国的に見ますと、法隆寺式の伽藍配置が多数知られておりますが、中国地方の寺院は断然この法起寺式の伽藍配置が多いですね。広島県もそうですが山陰あたりもこういう法起寺式の伽藍配置が多いわけです。最近、法起寺式の伽藍配置が大変きれいに出したのは、群馬県の山王廃寺というお寺でございまして。【スライド5】の右側の図は、去年出た報告書から転載しましたが、ご覧のように中門から入りますと右側（東側）に塔があって、左側（西側）に金堂がある。そして回廊は中門から出まして

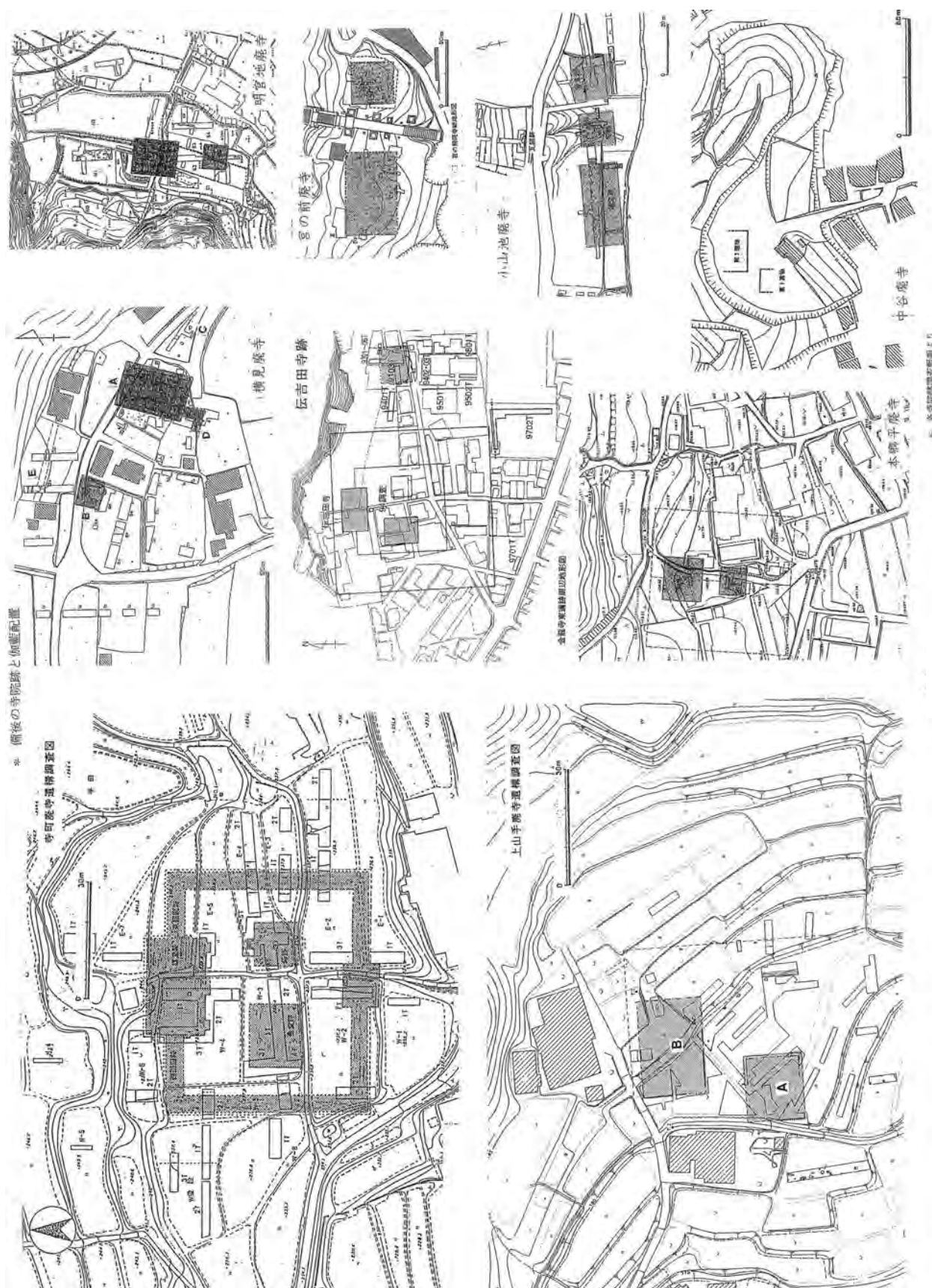
塔や金堂を囲んで北側の講堂に取り付く形になっております。こういう伽藍配置の典型的なものではないかと思います。

そして寺町廃寺ですが、お手元の資料24頁（本書の107頁に掲載）の左列の上に載せておりますが、ご覧のように中門、これは遺構としては確認できていないのですが、ここから回廊が出て、東側に塔、西側に金堂、これを回廊が囲んで講堂の東西に取り付いて閉じています。まさに典型的な法起寺式の伽藍配置をとっております。本家本元の奈良の法起寺の発掘調査は余り明確に行われておりませんし、一応そういうことになっておりますが、詳細で明確なことはよくわかっていません。むしろ、寺町廃寺が法起寺式の最も典型的な遺構が発掘された寺跡でして、法起寺式というより寺町廃寺式伽藍配置とでも呼びたいくらいに整ったものでございます。

（２）広島県内の古代寺院の伽藍配置

では、広島県内のほかのお寺の伽藍配置ですが、これはいろいろございまして法起寺式や法隆寺式のほか、さまざまな配置のものがございます。

一つはこちら【資料24頁（本書の107頁）の右列の上から2番目】、これは福山市の宮の前廃寺でございます。宮の前廃寺の場合、これも史跡になっておりますが、この発掘調査も私が関わりましたが、東側に塔、西側に金堂がある。ただし、この寺の場合、講堂が発見されていません。普通はこの北側に講堂があるはずなのですが、これは地形的に北側にすぐ丘陵が迫っておりまして、丘陵のきわに塔、金堂が建てられています。北側の丘陵を少し上ったところに現在は神社が建っていますが、地盤の高さを問題にしなければここに講堂が建つわけですが、存否は確認されておりません。また伽藍を囲む回廊もわかっておりません。塔と金堂の位置関係だけで言えば法起寺式だといえます。このように地方のお寺の配置というのは、中央の寺院のように伽藍の要素が全部揃っているようなものは少なく、また配置もいくらか変形されていることも多いのです。そのような例のもう一つ、小山池廃寺を見てみましょう【資料24頁（本書の107頁）の右の上から3番目】。小山池廃寺の場合は、中央に塔がありまして、



その東側に金堂，西側に講堂があり，横に一直線に塔，金堂，講堂が並ぶ全国的にも非常に珍しい配置をしております。調査前の予想では北側から講堂が出ると思ったのですが，そうではなく西側から出てまいりました。

それから，先の亀田さんの話の中でも，中谷廃寺の瓦が特異な作り方だという話がありましたが，その中谷廃寺の配置がこれです【資料24頁（本書の107頁）の右列の上から4番目】。中谷廃寺も全部は発掘調査されておられません。ちょっと余談になりますが，私は寺院の配置などを問題とします場合は，全面的な発掘調査をやってから議論すべきで，部分的なトレンチ調査で推定して議論すると，ずいぶん不明確な点が出てくると思っています。ですから，あとでもう一度，だれかが大規模に発掘すると，推定でああ言っていたけれど，全面調査後の報告書を見たら，あれは全然違うではないかということになりかねない。こうした広島県内のお寺も，もう一度全面的に掘れば寺町廃寺も含めていろいろ新しいことがわかんと思いますけれども，この中谷廃寺の場合は，北側に講堂（第2建物）があり，その南西に塔（第1建物）があります。ここは小学校の改築現場で，当時も古い校舎が建っていて思うように発掘調査ができなかったのですが，私は塔（第1建物）の東側に金堂があると思っているのですが，既にプールが出来ていて発掘調査できず確認できていません。ここに金堂があるとなれば，これは法隆寺式の伽藍配置になる。ただし，この寺の場合，大変おもしろいことがわかりまして，それは塔（第1建物）の西側に細長い溝がめぐっておりまして，この溝がお寺の周囲の丘陵の裾を区画しているようです。このお寺は周囲を丘陵に囲まれた高台の窪地のようなところに建てられていますが，塔（第1建物）から西側の溝（丘陵の裾）まではわずか6 m ぐらいしかなく，この間に築地の痕跡や回廊もありませんでした。つまりこのお寺は，寺域を区画するのに回廊や築地などを巡らさず，溝だけで区画していた可能性が高いことが判明しました。地方の寺院の場合はこういう変則的な造り方をしている例が非常に多いようです。

次は尾道市御調町にあります本郷平廃寺です【資料24頁（本書の107頁）の中列の上

から3番目】。これは南側の塔の背後に金堂がある。金堂の北側に講堂が出てくれば四天王寺式の配置になるわけですが、講堂や回廊の有無はわかっておりません。

次は明官地廃寺です【資料24頁（本書の107頁）の右列の上から1番目】。これは実は大変おもしろいのですが、お寺の配置が通常の南面ではなく、東に向いているようでして、南側に塔、北に金堂または講堂がありまして、こういうふうに並んでいます。この配置は東側を正面として眺めると、塔が左側（南側）にあって右側（東側）に金堂または講堂という配置になり、法隆寺式に近い配置と考えることができますが、西側に丘陵が迫っていて東側が開けているという地形的な制約があったのかもしれないと思いますが、お寺全体の向きがちょっと違っております。

それからもう一つ三原市本郷町にあります横見廃寺です【資料24頁（本書107頁）の中列の上から1番目】。これもまた非常に特異な配置をしております。講堂が東の端にありまして、西に塔と思われるものが発見されています。実はこの講堂と塔の間を掘りたかったのですが、当時は家が建っていて掘れませんでした。現在国の史跡になっておりますが、今では家も立ち退いておりますので、これから史跡整備に伴って発掘調査すればわかってくると思いますが、私は奈良の檜隈寺と同じような非常に特異な配置をとっているのではないかというふうに考えております。

（3）寺町廃寺の瓦積・埴積基壇の構造

今ご紹介しました広島県内の各地のお寺の配置を見ていただきましたが、そこで今日の話題の寺町廃寺がどうか、というのは次の資料25頁（本書110頁に掲載）をご覧くださいと思います。また写真【スライド6の左】は西南から眺めたものですが、寺町廃寺の建っていた場所の地形は、このように背後に山を背負いまして、山の際に建てられています。



【スライド6】「寺町廃寺遠景」

中央やや右寄りに大きな屋根の民家がありますが、この民家の後ろに台地がございまして、これが寺跡です。民家の脇に、寺町廃寺の史跡の石柱と説明看板が立っています【スライド6の右】。私が学生時代に瓦を拾ったのがこのあたりで、説明看板の後ろの切通し状の崖面にたくさん瓦が堆積していました。恐らく建物から落ちた瓦が南側の崖に集められて堆積していたのだと思いますが、もちろん皆さん今ここに行って掘ったらいけませんよ（笑）。この上に寺跡があるのですが、これが寺跡のある台地状の平坦地です【スライド7の左上】。これは北東から撮った写真ですけど、ここに約80m四方ぐらいの台地がございまして、今は水田になっております。【スライド7の中央下】は、私が昭和40年代に撮ったモノクロ写真ですが、今もある大きな屋根の民家は当時茅葺き屋根の農家でした。当時も一面田んぼになっていて稲が植えてありましたが、その田んぼの中へ石が積み重ねてあり一番上には宝篋印塔の相輪と笠が載せられています【スライド7の右上】。これは明治時代ぐらいに積み重ねたものですが、実はこの一番下に塔の心礎がございまして、この心礎を中心に発掘調査を開始しました。

発掘調査について、ちょっと自慢話みたいになりますが、このくらいのトレンチで寺跡の伽藍配置を正確につきとめた発掘例は全国的にもまれじゃないかと思うくらいきれいに建物跡などが出てまいりました。トレンチというのは幅3mで細長い溝状に発掘を行って遺構を探し出すような調査方法のことをいいますが、最初に塔の心礎を中心にトレンチを入れました。塔の心礎は移動していないようなので、この心礎を中心にして塔の基壇があることは間違いなさだろうから、ここを中心にして半分だけ掘ってみようと



【スライド7】「寺町廃寺の全景と塔心礎」

3 mの幅で東西にトレンチを入れました【スライド8の左】。そうしましたらこの心礎の東側で、塔の基壇（土壇）の東端が出ました。何とここには塼、今のレンガと考
えていただけたらいいのですが、塼が立て並べられていました。この塼は一段しか
残っておりませんでした。本来この上に二段目があったものか、一段の塼の上に瓦
を積んでいたのかもわかりません。もう少し細かく言うと、35cmから42cmぐらいの方
形で厚さ7 cmぐらいの塼を基壇の外面にきれいに並べて置いてありました【スライド
8の右】。それからもう一つ、塔の西側にトレンチを伸ばしましたら、金堂の基壇が
出てきた【スライド8の左】。つまりこの3 m幅のトレンチで塔と金堂が東西に並ん
で出てきたということでございます。

発掘調査では、塔をかなり調査
したのですが、心礎の下部も調査
しました。つまりこの心礎が動い
ているか動いていないか、心礎が
動いていたとすれば塔の規模を復
元するのが難しくなりますので、
まずそれを確かめました。そうし
ますと、まず大体動いてないとい
うことがわかった【スライド9の
左】。動いてないとする、塔の
全体はどういうふうになっている
のだろうかということで、今度は
北側へ向けてトレンチを拡張いた
しました。というのは南側を掘れ
ばよかったのですが、南側はあぜ
道がありましたから、下手すると



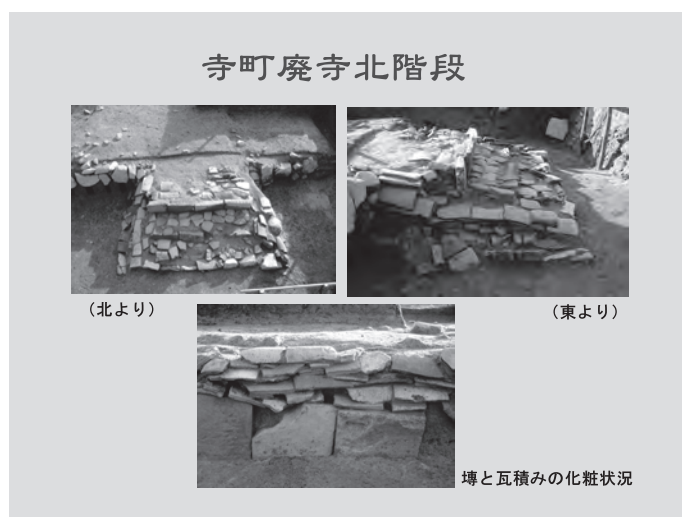
【スライド8】「寺町廃寺の塔跡と金堂跡」



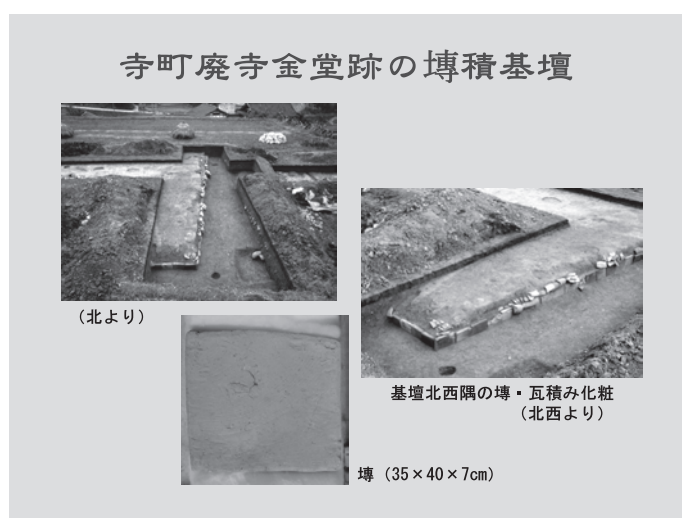
【スライド9】「寺町廃寺塔跡の心礎と階段」

田の畔で壊されている可能性もありましたので北側にトレンチを設定しました。そうしますと、何と北側から立派な階段が出てきたわけです【スライド9の右】。ちょうど心礎の中心のところに3段の階段が出てきました【スライド10の左上】。階段は3段つくられていますが、下部に塼が並べて立ててありまして、部分的に石で補修されています。階段面にも瓦や塼が敷かれていました【スライド10の右上】。すばらしい遺構がよく残って出てきたと思いました。塔の基壇は塼積基壇であることも発掘によってわかったことです【スライド10の下】。

次は金堂で、金堂も非常にきれいに出来ました【スライド11】。最初は金堂の西側基壇が東西トレンチでわかったのですが、そこから南北にトレンチを広げましたらきれいに金堂の西側基壇が出てきました【スライド11の左上】。西側基壇が北側基壇に曲がるコーナーの状況も明らかになりました【スライド11の右】。金堂も塔と同じように塼を立てて並べています。建築用語では、こういう風に塼を立てて並べる方法を「小端建（こばだて）」と言っておりますが、ご覧のように小端建した上に積んだ瓦はかなり失われておりました【スライド11の右】けれども、瓦が積んであった状況がわかっております【スライド10の下】。それから塼と呼ばれるレンガがこれです【スライド11の左下】。塼だけ



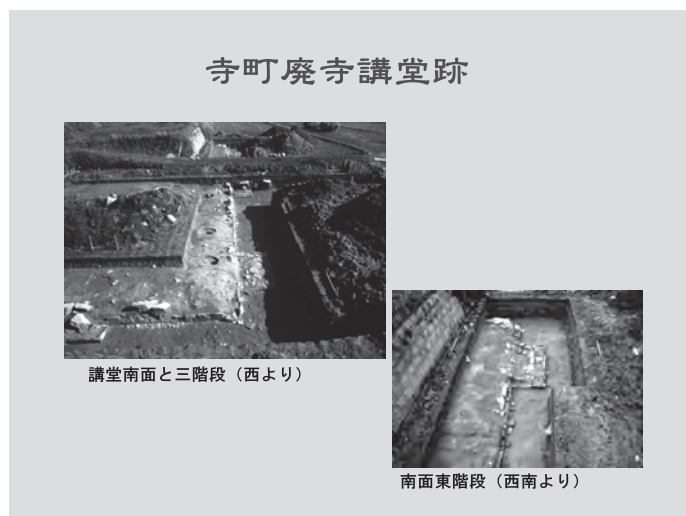
【スライド10】「寺町廃寺北階段」



【スライド11】「寺町廃寺金堂跡の塼積基壇」

を撮った写真ですが、縦・横35～40cm、厚さが7 cmぐらいのこういう大きなレンガ状のものを基壇の周りに立て並べて塔、金堂などの建物の基壇化粧がされていたということでございます。

そして今度は塔や金堂の北側に講堂があるだろうと推測してトレンチを入れましたら、これまたうまくぴったりとこの講堂の南側が出てまいりました【スライド12】。講堂の周りもやはり塼を立て並べていました。そして講堂で驚きましたのは、何と階段が三つ取り付いておりまして、これは全部掘ってみました。講堂に階段が三つある寺院は全国的にみてもそうたくさんはございません。大変なお寺だなあとということがこれでわかったわけでございます。それで本当は講堂を全面発掘すればどのような規模の建物だったのかということがわかるのですが、この発掘調査は史跡指定のための資料を得る目的の調査でしたから、基本的に必要最小限の部分だけを発掘しました。そのため講堂等については全面的に発掘しておりません。奈良の山田寺で奈良国立文化財研究所が全面的に発掘調査しましたが、ああいう風に全面的に発掘調査すればもっといろんなことがわかると思います。しかし、寺町廃寺の場合は、そうした部分的なトレンチ調査でも非常に大きな成果が上がったということでございます。それから寺町廃寺の講堂について、大変おもしろいのは、講堂の中心部に回廊が取り付いていることがわかったことです。法起寺式の伽藍配置の場合、回廊というのは通常は講堂の前面に取り付くつくことが多いのですが、寺町廃寺の場合は真ん中に取り付いていることがわかりました。さらにおもしろいのが、講堂西側の回廊が取り付く部分にこんな小さな張り出した段がついていました。これ何だろうかと考えましたが、回廊が講堂に取り付



【スライド12】「寺町廃寺講堂跡」

く部分の隅っこにつけた小階段ではないかと思っております【スライド13の左】。

それともう一つ、講堂の後ろの部分で出っ張った石で化粧した土壇が見つかりました【スライド13の右】。つまり、基壇が二重になっていました。これを二重基壇と言っておるわけで、基壇の前の方にはないのですが、後ろだけ二重基壇になっていました。何で後ろだけ二重基壇にしたのかわかりませんが、これも非常に珍しい基壇の造り方とすることができます。

次に回廊ですが、これは塔の東側から構造がよくわかる状態で見つけました【スライド14の左】。回廊の基壇外側は石が積んであります。回廊の幅は、約4.4～4.6mぐらいあります。

それから、発掘した当時は私も思いつかなかったのですが、最近になって全国的な発掘例などから、もしかしたらこれがそうだったのかと思いましたのが、この穴です

【スライド14の右】。これは東回廊の外側のトレンチで見つかった非常に大きな掘り方の穴です。掘り方というのは、柱を立てるために掘った穴のことを言うのですが、この中に実際の柱を埋め込みます。この大きな掘り方の穴は、直径が1 m以上ある大きなもので、通常こうした穴が並んでいくつも見つかりと掘立柱建物があったということになるのですが、この穴の場合



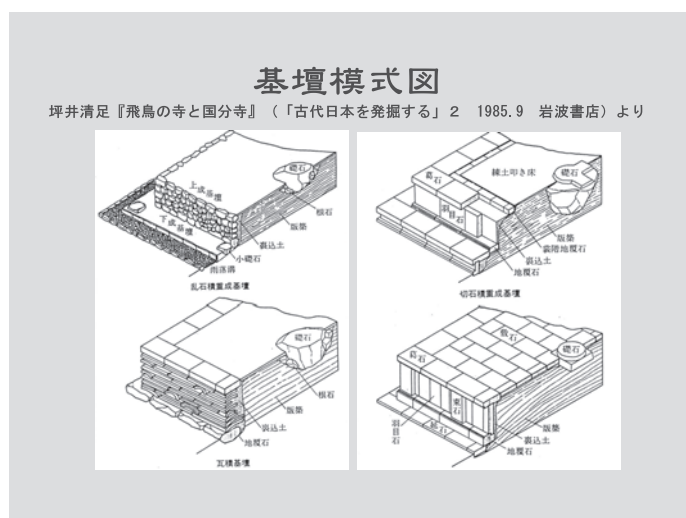
【スライド13】「寺町廃寺講堂跡」



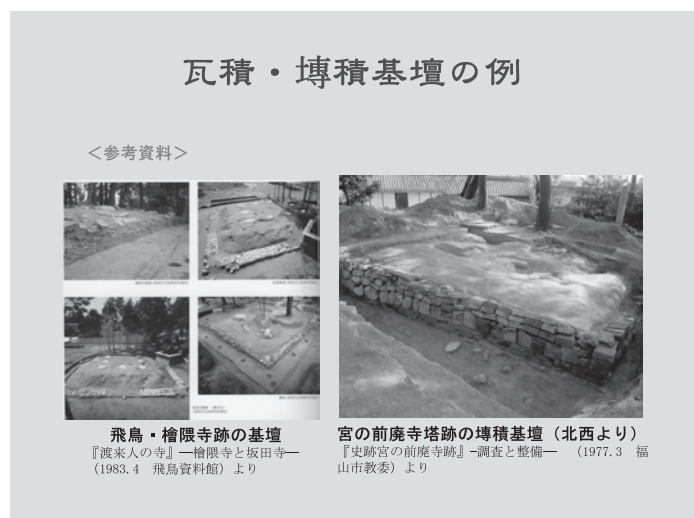
【スライド14】「寺町廃寺回廊跡ほか」

は、周辺には全く同類の穴がなく、この穴だけ単独で見つかりました。それで発掘した当時は何だろうか、ということで報告書にも余りこの穴のことは詳しく書いておりません。

さて資料25頁（本書の110頁に掲載）の図面をご覧ください。わかるように、講堂、塔、金堂、回廊などの主要な堂塔の配置が正確に復元できました。講堂につきましては、ほぼ全体の規模が判明しておりまして、東西が25.1m、南北が14.7mという講堂で、これでどのような建物が建つかということを経験家の専門家といろいろ相談しまして復元案を考えてもらったのですが、宮本長二郎さん（元奈良国立文化財研究所の建築史学者）は資料25頁（本書の110頁に掲載）の右上に示しておりますような桁行きが7間、梁行きが4間の入母屋造りの建物が建つだろうと復元推定されております。



のところで出てきました二重基壇は、画面の左上のような構造をしております、一段目を下成基壇、二段目を上成基壇と呼んでいます。左下は瓦積基壇の構造を示していますが、寺町廃寺の場合は一番下に塼を立て並べていますが、こちらは石を地覆にして基礎にしています。また右側の基壇は、切石積基壇で平城京など畿内の有力な寺院を中心に採用されて基壇で、非常にきれいな切石が側面だけでなく壇上にも敷き詰められた大変立派な基壇です。塼積や瓦積基壇が寺町廃寺で発掘されましたときに、全国的にも非常に珍しいと思ったのですが、畿内の例では奈良県の檜隈寺という渡来人の東漢氏が造ったお寺の基壇が二重基壇や瓦積基壇を採用しています【スライド16の左】。広島県では、塼積基壇は先ほども伽藍配置のところで紹介しました福山市の宮の前廃寺に類例があります【スライド16の右】。宮の前廃寺は塔と金堂の所在がわかっていますが、金堂の基壇はほとんど失われており、塔の基壇が比較的よく残っております。宮の前廃寺の塔基壇の場合は、下部に横にした塼を2段積んでその上に縦にした塼を一列並べて、さらにその上にもう一度横にした塼を数段積んでいます。ただし、この塼は寺町廃寺のように大きな塼ではなく、30cm四方のものとこれを半分にした今のレンガに近いものが使われています。これらは時代的に少し下って奈良時代のものがございます。



【スライド16】「瓦積・塼積基壇の例」

(4) 奈良の寺々の伽藍と寺町廃寺

さて、ここで休憩がてらちょっとクイズですが、皆さんこれはどこのお寺だと思われませんか【スライド17】。おわかりでしょうか。どこでしょう。斑鳩と書いてありますけど、行かれた方はすぐわかりますが、これが法起寺です。法起寺式の本家本元の法起寺ですが、現在残っている古い建物は三重塔だけです。背後の建物は、古くは講

堂の位置にあたるところですが、現在は別の役割の建物です。

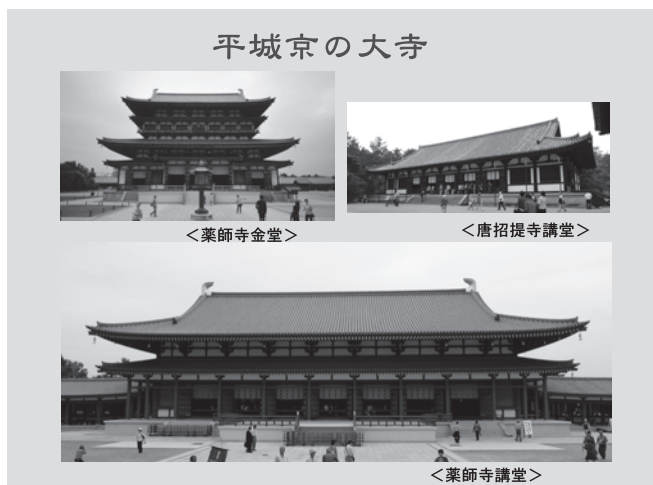
じゃあこれどこでしょう【スライド18】。平城京の大寺と書いていますが、平城京の中にある大寺で今でも観光名所になっておりますので、行かれた方も多いのではと思うのですが、薬師寺の復元された金堂です【スライド18の左上】。薬師寺は私が奈良におりましたころ、この金堂を再建するために基壇の発掘調査をいたしました。近年奈良の古いお寺ではどんどん復元や再建、解体修理が行われておりますが、薬師寺では現在は東塔の解体修理をやっておりますね。何で金堂を先に紹介したかというのと、金堂が復元されたのちに講堂も復元されましたが、現在は回廊が講堂に取りついて完全な復元がなされております。その薬師寺の復元講堂が【スライド18の下】です。さすがに大きなものでございまして、これは正面の桁行きが9間あります。つまり、寺町廃寺の講堂の7間よりも一回り大きく、階段も三箇所付いています。

寺町廃寺の1間の幅は薬師寺ほど大きくありませんから、寺町廃寺の講堂はもっと小さくなりますけれども、平城京の寺院の講堂というのはこういう規模だということですが、薬師寺の回廊は講堂のほぼ真ん中に取り付いていますから、階段と共にこの点は寺町廃寺と共通しています。

もう一つ、平城京のお寺で、講堂が有名なのはどこでしょう【スライド18の右上】。それは鑑真の居た唐招提寺の講堂で、これは実は平城宮の朝堂院の建物を移築したものだと



【スライド17】「斑鳩の寺」



【スライド18】「平城京の大寺」

いわれておりまして大変有名な講堂です。

最後にもう一つ、これはどこでしょう【スライド19】。無論私が言うまでもなく法隆寺でございます。中門を入りまして、右（東）側に金堂があつて、左（西）側に塔がある配置です。そして金堂と塔の間から奥を見ますと、現在は講堂が見えますが、本来は金堂と塔は回廊に囲まれておりまして、回廊の外に配置された講堂は見えなかったのです。現在は講堂が見えるように回廊を講堂の方まで拡張しております。

では寺町廃寺のような法起寺式ならばどうかというと、寺町廃寺の場合は中門を入りますと右（東）側に塔があつて、左（西）側に金堂があるという風になるわけです【スライド20】。これは、先ほど話に出ました奈良国立文化財研究所の宮本長二郎さんに御協力いただいて、福山の県立歴史博物館の常設展示室に作った復元模型ですが、

東側の塔は、これを五重塔にするか三重塔にするかで議論したのですが、寺跡の立地が小高い丘の上ですし、それから基壇が若干小さいなどの点から、五重塔の可能性もないということとは言えないのですが、三重塔のほうが妥当だろうということで法起寺と同じ三重塔に復元しました。それから西側の金堂の回廊をはさんで外側には、発掘調査では出ておりませんが、僧坊はこのあたりではなかろうかという推定で僧坊を復元しています。それから講堂の後ろ（北）側が一段高くなっておりまして、ここにはトレンチを入れておりません



【スライド19】「斑鳩の大寺」



【スライド20】「寺町廃寺伽藍復元模型」

が、何かお寺の付属施設があったのではないかという風に思っております。

（５）寺町廃寺の軒瓦の文様と系統

さて、次のスライド【スライド21】は、備中の栢寺廃寺の軒丸瓦です。寺町廃寺のものと同じ範型で造られている軒丸瓦です。先ほど亀田さんの話で詳しくお話がありましたので、重ねて説明は省略します。

次は、備中の大崎廃寺の水切りの付いた軒丸瓦です【スライド22】。

おもしろいのは水切りの部分に細い線が入っておりまして、また花卉の中へも細かな輪郭線が入っていて、形式的には複弁蓮華文軒丸瓦に近いものです。蓮華文の花卉が輪郭線で複弁風にしてあります。私は最初にこの瓦を見たときに、この瓦は一体古いのか新しいのかと悩みました。

一見すると古いように見えます。しかし、どうもこの瓦当の径が余りにも大きいのです。瓦当の径が大きいということは、私は余り古くはさかのぼれないのではないかということで、やはり寺町廃寺の瓦が一番古いというのが正しいというふうに考

備中・栢寺廃寺の素弁文軒丸瓦



【スライド21】「備中・栢寺廃寺の素弁文軒丸瓦」

備中・大崎廃寺の水切瓦



【スライド22】「備中・大崎廃寺の水切瓦」

寺町の水切瓦

素弁文のSI形式



【スライド23】「寺町の水切瓦」

えたわけですね。これ【スライド23】が、寺町廃寺の一番古い瓦です。先ほどの栢寺廃寺と同じ範型でつくられた瓦です。先ほど亀田さんの話にありましたように、寺町廃寺と栢寺廃寺の瓦を比較すると、栢寺廃寺の方が範型のキズが小さく、寺町廃寺の方が明らかにキズは大きくなっている。つまりこの瓦の範型は栢寺廃寺で最初に使われた後に、少し傷みが進んでから寺町廃寺にもって来られて使われたということがわかりました。そうしますと、早速、岡山の方々から、松下は寺町廃寺の瓦が一番古く、だから『日本霊異記』に出てくる三谷寺だって言ったけど、もっと古いお寺が備中にあるんじゃないかということをおっしゃいました。これまたいろいろ私にも私の言い分があるわけですけど…。それから、ちょっとおもしろいのが、寺町廃寺の最も古い瓦に水切りがわずかに付いていますが、水切りのつく方を下とすると、中房の蓮子の間にある範型のキズが、上部につくものと下部につくものがある。つまり、明らかに範型が180度ほど回転して使用されていることがわかります。次の花卉の長い瓦には45度ほど回転したのがあります。私はこれで、範型がもしかしたら枠が四角になっているのではないかな、あるいはもしかしたら明確に位置がわかるような印がつけてあって、つくる時に傷が下へ行った場合と、上へ行った場合があり、傷が横に来た例は出ておりませんので、そのように考えています。

これ【スライド24】は寺町廃寺の次の段階の瓦ですけれども、これは岡山でも出ておりませんが、これが寺町廃寺で一番たくさん出ております。ちょっと花卉が長くなって、水切り部分が古いものよりも少し大きくなっている。【スライド24】の右と左はよく似ているのですが、違いは中房の蓮子にあって、左側のものは中央の蓮子の周りに4つしか連



【スライド24】「寺町廃寺の水切瓦」

子がありませんが、右側のものは8つほどある。私は最初、花卉の形式は同じだと考えておりましたが、妹尾周三さんが細かく観察して研究しておられ、もう少し検討してみなきゃいけないなと思っております。実はこの種の瓦がどのようにして寺町に持ち込まれたか、ほかに類例が日本にないのだろうか調べてみました。さっきの栢寺廃寺については、なかなかいい例がないわけですが、大阪の柏原市にあります山下廃寺に少し似た例がありました【スライド25の右側】。ちょっと違うところは、花卉と花卉の間の間弁と呼ばれるものが、真ん中の中房のところまで入っていますね。寺町の場合は、間弁は途中で消えて中房まで達していないわけです。それから花卉の弁端が少し尖っているように見えますが、全体的な花卉の形はよく似ておるように思います。これとほぼ同じ形のものが名古屋の尾張元興寺にもあります【スライド25の左側】。

瓦の花卉の形が似ている、似ていないということは、どうでもよさそうな話ですが、類似する理由がなにかあるのだろうと思っております。

【スライド26の左側】は、近江（滋賀県）の草津市にあります宝光寺というお寺の瓦です。この瓦もちょっと弁端が変わっているようですが、寺町と非常によく似た細長い花卉をデザインしてあります。また間弁は、真ん中の中房に達せず途中で消えておりまして、寺町とよく似ています。それから、実はかなり前の話ですけども、東北大学の伊東信雄先生が、広島大学に集中講義に来られました



【スライド25】「寺町廃寺と類似の素弁文瓦 1」



【スライド26】「寺町廃寺と類似の素弁文瓦 2」

ときにお話をうかがって知ったのですが、福島市の腰浜廃寺に寺町廃寺と非常によく似た瓦があります【スライド26の右側】。これについて伊東先生が論文に書かれたのを見ますと確かによく似ているのですね。これは弁端の先が尖っておりませんし、そういう点でも寺町廃寺に非常に近いと言えるわけです。

私はこれらの寺町廃寺と類似する瓦をすべて渡来人系の寺の瓦だとは思っておりませんが、多くの人は近江や尾張、福島のお寺は渡来人系の寺であると考えられているようです。こうしたことを考えるうえでは、寺町廃寺などでは、素弁から複弁にどのように変化するか、というようなことにも注目すべきではないかと思っております。寺町廃寺では素弁の次の段階で、複弁の軒丸瓦が作られています【スライド27】。

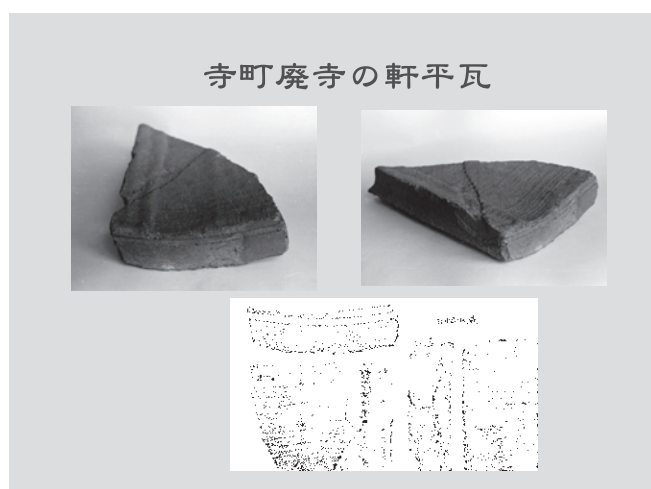
ところで、寺町廃寺の瓦を焼いたのは、寺町廃寺の直ぐ北にある大当瓦窯跡であることが確認されております。一番新しい瓦は平安時代に入っているのではないかと考えているのですが、大変おもしろいのは素弁と複弁が交互にデザインされた珍しいもの



【スライド27】「寺町廃寺と大当瓦窯跡の水切瓦」



【スライド28】「寺町廃寺の素・複混弁文瓦」

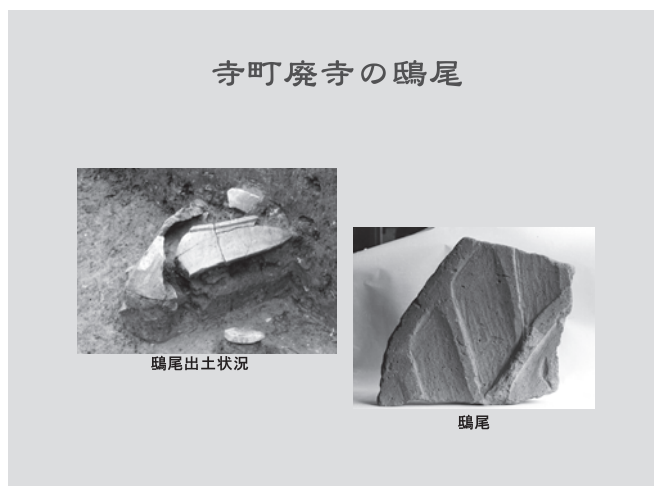


【スライド29】「寺町廃寺の軒平瓦」

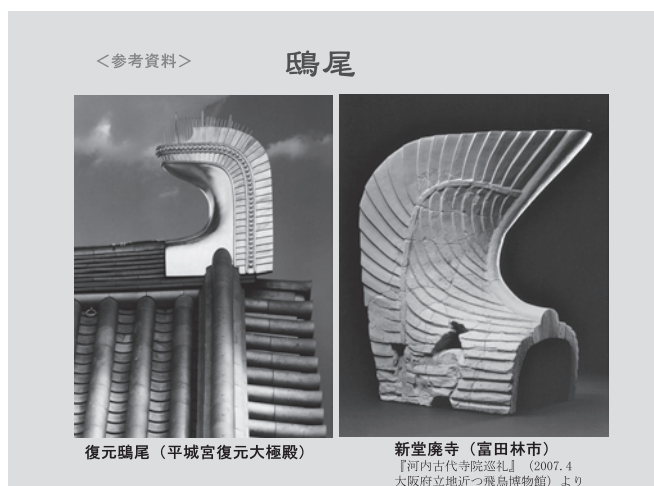
が作られていることです。これは私が勝手に素復混弁という名前をつけたのですが、こうしたものが明らかに大当瓦窯で焼かれて寺町廃寺で使われているということです【スライド28】。それから寺町廃寺では、軒平瓦が出ておりません。ただ1点、平瓦の端面に弧線を入れた瓦が出ています【スライド29】。これを軒平瓦と考えるか、平瓦と考えるか、いろいろ見方がありますが、これは普通の平瓦よりやや厚手で、そして明らかに広い端面をねらってヘラで弧線をつけておきますので、これは軒平瓦と見ていいのではないかと考えております。そうじゃないと言う方もおられますが、私は軒平瓦とみていいのではないかと考えています。

寺町廃寺では、鴟尾も立派なものが出ておりまして、金堂のちょうど棟の部分あたりから出ています【スライド30】。また別のタイプの鴟尾も寺町廃寺では見つかっています。多分、大屋根の棟の端っこについていたものと思われます。ついですが最近復元された奈良の平城宮の大極殿の鴟尾は金箔で飾ってあります【スライド31の左側】。また有名な唐招提寺の鴟尾には鰭の部分に段がついていますが、寺町廃寺の鴟尾の鰭部にも段がついておりますし、大阪の新堂廃寺のもの【スライド31の右側】には全体に段が表現されてい

るものもあります。これらとよく似た段を表現した鴟尾が、寺町廃寺で出土しました。



【スライド30】「寺町廃寺の鴟尾」



【スライド31】「鴟尾」

（６）唐三彩と柄香炉

寺町廃寺の調査でもう１つ注目されるのが、この三彩です【スライド32】。大変おもしろいのは、割れた破片が、講堂の別の場所からいくつか出土し、焼けて表面が荒れた破片と焼けてないものがくっつきました。陶磁器の研究者によると、晩唐の三彩とされる方と盛唐の三彩ではないかと言われる方もあります。完全な形のもので示すと【スライド33の右側】、このような形の長頸壺と考えられます。寺町廃寺のものは浮彫の文様は入っておりませんが、こうした立派な唐三彩が寺町廃寺で使われていたということがわかりました。

さらにもう１つ、こんなものも出土しました【スライド33の左側】。これは柄香炉、つまり、お坊さんが御経を読む時や儀式の時に使う特別な香炉で、これは法隆寺などに実物が残っています。この柄香炉の柄の尻の部分が出土しました。形はいろいろあるのですが、これは宝珠のような形をしたものですが、こうしたものも古代の日本の寺院に多く使われていたようです。出土した実物は展示してありますので、あとで見てくださいと思います。こうした柄香炉は、韓国や中国でも出土して



【スライド32】「寺町廃寺の唐三彩」



【スライド33】「唐三彩と柄香炉」

おりまして、寺町廃寺のものが、必ずしも伝来品だとは言えませんが、こうした古代寺院らしい仏具も見つかっているということをご紹介します。

（7）寺町廃寺周辺の関連瓦窯跡と古代寺院

それから、先ほど少し話しました瓦を焼いた窯跡の調査もいたしました【スライド34】。寺町廃寺の直ぐ北側の山を越えた大当という場所ですが、瓦が散布している窯跡らしき場所を、当時最新鋭の電気探査という方法で、地中に電流を流して地下遺構の有無を調べました。そうしますと10か所ぐらい窯跡らしい場所があるということがわかり、部分的にトレンチを入れて確認しました。窯跡の具体的な形がわかったのは1基だけだったのですが、登り窯ではなく平窯であるということもわかりました【スライド35の左側】。

それから次のスライドは上山手廃寺の瓦です【スライド36】。私は寺町廃寺は三谷郡で唯一の寺だと思っていましたら、寺町からわずか1キロも離れてないところからこの上山手廃寺が発見されました。発掘いたしましたら寺町と同じ瓦や、これは最近出たのだそうですが、立派な鴟尾も出土しています【スライド36の右側】。この鴟尾の破片を見ると、鰭部の内側に何か文様が付けられていた痕跡もあります。先ほどの亀田先生のお話にもあった韓国のお寺の鴟尾には蓮華文の付いたものもありましたが、それに類似した何かの文様が付いていたのかもしれません。



【スライド34】「大当瓦窯跡」



【スライド35】「大当瓦窯跡と康徳寺廃寺の三郎丸瓦窯跡」



【スライド36】「上山手廃寺の水切瓦と鴟尾」

そういうわけで、三谷郡には寺町と上山手の二つのお寺があり、隣接する三次郡には寺戸廃寺がありました。寺戸廃寺と同じような文様の複弁蓮華文の軒丸瓦が出ています。ただ、ここでは若干寺戸廃寺とは違う瓦も出ておりまして、どうも花卉の形が寺町と違っているものが含まれています【スライド37の右側】。この瓦は、花卉の真ん中を二つに割って複弁にしたようなものでして、実はこの寺戸の複弁の瓦の年代的位置づけに悩んだのですが、私はこの瓦の胎土が非常に悪いので、新たにこうした変則的な複弁文ができたので



【スライド37】「寺戸廃寺の水切瓦」



【スライド38】「亀井尻瓦窯跡の水切瓦と周辺出土の唐草文軒平瓦」

はと考えました。それからもう一つこの瓦の特徴は、複弁としては少し古そうな感じを受けるところから、この瓦は寺町の素弁を改変して作られた可能性を考える方もおられますが、私は素弁とは全く別系統の瓦がモデルとなって、でき上がったのだというふうに思っています。

それから、以前広島大学が庄原市で亀井尻という瓦窯跡を発掘いたしました。これも登り窯ではなく平窯でした。ただ、私はこの平窯が非常に特異な形をしておりまして、もしかしたら日本で最古の平窯と言えるのではないかと、そうでなければ全く新しい形の平窯か、そうでなければ発掘が不完全だったのではないかと、などと考えたわけですが、少し特異な形の瓦窯です。最近はこのそばにお寺があったのではないかと、妹尾周三さんが言っておられますが、発掘で確認されたわけではあ

りません。これはこの瓦窯の近くから窯跡では見つかっていない唐草文軒平瓦が出てきておりまして、こうしたこともお寺の存在を推定する根拠となっているようです【スライド38の右側】。この唐草文の軒平瓦は備北地域では本当に珍しいものですが、わずかに1点ですが見つかっています。さらにもう一つ、この庄原市で伝神福寺と言っておりますが、寺町に匹敵する古いお寺がわかっています。寺の名前は、江戸時代の『芸藩通志』に書いてありますので一応伝神福寺跡にしておきますが、素弁軒丸瓦が見つかっております【スライド39】。これは私が寺町でSⅡと言っております細長い花卉を持つ素弁蓮華文軒丸瓦で、これは寺町よりも花卉が細長くなっているような感じですが、形から言うと古い様相を示しておりまして、備北地域では寺町の次につくられた寺ではないかと思っております。伝神福寺跡の複弁文の瓦は寺町廃寺と類似したものがあり、大当瓦窯でつくられた瓦ではないかというふうに言われてもおります。

伝神福寺跡では、もう一つ備北地域では類例のない瓦が1点出ています【スライド40の左】。それは軒丸瓦の外縁に鋸歯文が入った複弁蓮華文の瓦ですが、寺町廃寺の複弁とはかなり趣が違っておりまして、以前私が備北地域の瓦をまとめましたときは、このような複弁の瓦は奈良あたりの複弁の瓦が入ってきているのだなと思ったわけですが、花卉の形などが奈良のものとも違うと今は思っております。



【スライド39】「伝神福寺跡と寺町廃寺の素弁文瓦」



【スライド40】「伝神福寺跡の複弁文瓦」

それから世羅の康徳寺廃寺でも寺町廃寺と同じような水切りのある複弁の瓦が出ていますが、水切りの形が非常に小さい【スライド41】。ちょこっとついているといった感じです。【スライド41の右】は、瓦を下（横）から見たものですが、わずか1センチほどの水切りが本当にオマケのようについています。この寺町に特徴的な水切り瓦ですが、備中、備後、それから出雲で知られていましたが、安芸でも2点ほど出てまいりまして、安芸高田市の明官地廃寺では、山田寺式の軒丸瓦に水切りがついている珍しいものも見つかっています【スライド42の左】。それから三原市の横見廃寺では、複弁の文様で水切りのついたものが出てきております【スライド42の右】。

出雲では、水切り瓦が出るお寺として神門寺というお寺がよく知られています【スライド43の上】。この神門寺の境内にある廃寺には明らかに寺町廃寺の影響

と思われる瓦があるということは、以前から広く知られておりました。最近、出雲市の斐川町でいくつか寺町廃寺の水切り瓦に関係する瓦が出ております。ちょうど三次から出雲市へ行く道筋になりますけど、あの357本もの銅剣の出た荒神谷遺跡のある斐川町です。ここに小野遺跡でありますとか、そのほかの出土地が2箇所ぐらいあるら



【スライド41】「康徳寺廃寺の水切瓦」



【スライド42】「安芸の水切瓦」



【スライド43】「出雲の水切瓦」

水切瓦編年表

松下正司「水切瓦再考」（『考古論集』1993.3 潮見浩先生退官記念論文集）より

第2表 いわゆる水切瓦 編年表

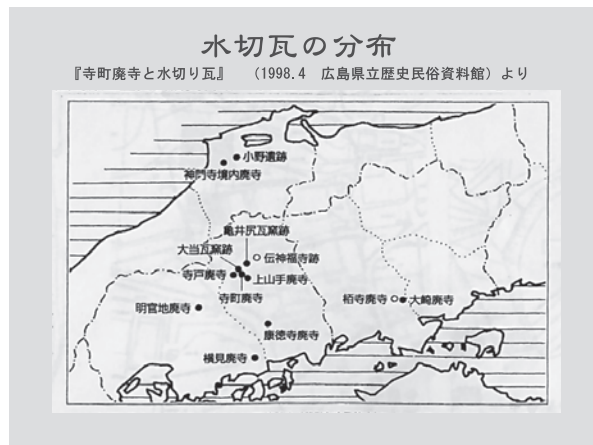
通称		備 後 国		安 芸 国		備 中 国		出 雲 国	
政治史	美術史	三 次 郡	三 次 郡	三 次 郡	三 次 郡	三 次 郡	三 次 郡	沼 田 郡	高 宮 郡
飛鳥時代	710	寺町廃寺	大当瓦窯跡	上山手廃寺	寺戸廃寺	龜井瓦窯跡	佐神福寺跡	横見廃寺	明官地廃寺
奈良時代	794	白鳳系良簡型 S1 S2 F1A		F1A	F1		F1 F2 F1A	F	T
奈良時代	794	天平系良簡型 F1B F1C	F1B		F1 F2		F1B		
平安時代	812・貞観・藤原	K K							
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								
平安時代	812・貞観・藤原								

【スライド44】「水切瓦編年表」

しいのですが、これらも大当瓦窯と関係の深い遺跡というふうに考えられております。

私が寺町廃寺の水切り瓦を研究しました頃は、発掘調査で出土したものは少なく、ほとんどお寺や役所に所有されている瓦だけで研究しましたので、その段階では私は寺町廃寺の瓦とほかの寺の瓦の文様は似ているけれど、製作地や瓦の範型は全く別ものだろうと考えました。つまりそれぞれの寺の水切り瓦は、地域の中核となるお寺に何らかの関係で導入されて、そこから周辺のお寺に文様や技術が動いて、瓦はそれぞれの寺院で作ったのではなかろうかと推定しました。ところが、最近の研究では、範型や技術そのものが寺町を核としてかなり広範囲に動いているということがわかってきました。出雲で最近明らかになった水切り瓦は、斐川町の三井Ⅱ遺跡

【スライド43の左下】と堀切瓦出土地



【スライド45】「水切瓦の分布」

【スライド43の右下】ですが、三井Ⅱ遺跡というのは瓦窯だといわれておりまして、この瓦と堀切瓦出土地の瓦は、同じ範型で製作されていることが明らかになっており、驚いたことにこの二つの瓦と三次の大当瓦窯の瓦も同じ範型で製作されたことが出雲市の花谷浩さんなどの研究で明らかにされております。軒丸瓦以外の瓦の製作技法などからも大当瓦窯の職人が範型と瓦作りの道具一式を持って出雲に来て瓦を製作した可能性を指摘されています。とすれば、寺町と出雲は大変交流が盛んだったということになるわけで、その背景などについても、今後いろいろ研究がなされれば面白いことがわかってくるのではないかと思います。【スライド44】の瓦の編年表は、以前私が作ったものですが、資料28頁にも載せています。スライドの方には、出雲の新たに判明した水切り瓦出土地を、欄外に参考までに書き出しています。

以上のように、寺町廃寺を中心に備北地域から備中の大崎廃寺や栢寺廃寺、出雲の神門寺廃寺や小野遺跡、安芸では明官地廃寺や横見廃寺など中国地方の中央部を南北につなげて水切り瓦が分布して、特異な文化・交流圏を形成していたことがおわかりいただけたのではないかと思います【スライド45】。

（８）安芸・備後の初期仏教文化の様相

最後に少しだけ安芸と備後の初期仏教文化の様相についてまとめておきます。

最古の瓦は三原市本郷町の毘沙門山の南麓から出土した瓦です。これは飛鳥様式の古い瓦ですが、瓦が単独で出土したのみで寺院跡の実態はわかりません。これに続く最古の寺院といえるのが同じく本郷町の横見廃寺で、同範の出土瓦から飛鳥の檜隈寺や呉原寺など東漢氏と呼ばれた渡来系の人たちが建てた寺院と関係が考えられます。また法隆寺の若草伽藍のバルメット（忍冬文）の軒丸瓦も出土し、当時の大豪族・蘇我氏との関連が考えられ

安芸・備後の初期仏教文化

- 仏教文化伝播の時期（瓦からみた年代）
- 飛鳥時代末期～白鳳時代初期
- 大化改新前後（645年頃）
- 最古の瓦——毘沙門山南麓出土瓦
- 素弁蓮華文軒丸瓦（飛鳥様式の瓦）
- 大和／豊浦寺・奥山廃寺・和田廃寺
- 摂津／舟橋廃寺など
- 続く瓦——横見廃寺単弁火炎文瓦
- 大和飛鳥／檜隈寺・呉原寺と同範瓦
- 渡来系氏族（東漢氏）関係寺院との関連
- バルメット文瓦——法隆寺若草伽藍跡・中宮寺跡と関連
- 蘇我氏との関連

【スライド46】「安芸・備後の初期仏教文化」

ております【スライド46】。

さて古代寺院からみますと、当時の広島県は安芸の東部と備後の南部と北部に特徴があります。安芸の東部の場合は、飛鳥様式の瓦とか飛鳥の火炎文の瓦と同範のものが入っています。備後の南部の場合は、小山池廃寺のように藤原宮式の瓦やいわゆる飛鳥の本流のお寺といわれる川原寺式などが特徴的に分布しています。それから備後の北部は、寺町廃寺（三谷寺）を中心に独特の水切り瓦が分布し、一つの郡に一つのお寺というようなあり方をしています。これは先ほども触れましたが、寺町廃寺（三谷寺）のある三谷郡には上山手廃寺が見つかって郡内に二寺あることになりましたが、ほかの郡にはありません。それはこれから出る可能性もありますが、今のところは三谷郡を除いては大体一郡一寺的な様相を示しているとしてよいのではないかと思います。時期的な寺院建立の広がりを見ると、白鳳前半期には安芸の東部で建立が始まり、白鳳中期になって寺町廃寺など備

後北部に広がります。安芸西部や備後南部には白鳳後半期から奈良時代になって、建立の波が来るようです。特に備後南部はこの時期に急激にお寺が増えてきます

【スライド47】。この中で、安芸の明官地廃寺は、郷寺になるのか郡寺になるのかわかりませんが、内部寺という郷の名前を冠した寺名を持つことがわかっています。また備後南部の宮の前廃寺は寺の名前はありませんが、女性の名前が多いのですが、寄進者名を記した文字瓦がたくさん出土しています【スライド48】。

各お寺の規模を見てみると、寺町廃寺は

安芸・備後の初期仏教文化

● 仏教文化の伝播と地域的特徴

- 安芸東部・備後南部・備後北部に特徴
- 安芸東部——飛鳥様式の瓦、大和の火炎単并文・バルメット文の瓦が分布
- 備後南部——川原寺式・藤原宮式の瓦が分布
- 備後北部——三谷寺を中心に水切り瓦が分布、一郡一寺の様相
- 時期的には
- 白鳳前半——安芸東部へ
- 白鳳中頃——備後北部へ
- 白鳳後半——備後南部へ
- 白鳳後半～奈良時代——備後南部に寺院が急激に増加
- 平城宮跡式瓦が広く分布

【スライド47】「安芸・備後の初期仏教文化」

寺院跡と史料

- 寺町廃寺は、『日本霊異記』の三谷寺の可能性が高い。郡寺の存在を語る
- 百済との関係、大和へ資材調達など地方寺院の建立事情を語る貴重な史料
- 明官地廃寺の文字瓦は郡寺だけでなく、郷寺（内部寺）の存在を予測させる
- 宮の前廃寺の文字瓦は、寄進者や女性信者など、建立を支えた人々の解明に重要

【スライド48】「寺院跡と史料」

80～100m 四方ぐらいがお寺の中心的施設となっているようで、約1町四方ぐらいが地方寺院の規模のようです。伽藍配置は法起寺式が多いのですが、なかには法隆寺式もありますし、あるいは非常に特異な配置の寺院も多くみられます。建築技法的には、基壇に瓦積基壇、あるいは埴積基壇、それに乱石積基壇などがあり、寺町廃寺と上山手廃寺が埴積でも小端立てという共通する技法を採用し、基壇も二重基壇という地方寺院には珍しい基壇を構築しています。こういったところが特徴としてみてとれるようです【スライド49・50】。

（9）寺町廃寺の保護・活用に向けて

以上、ちょっと話がまとまり切らないような感じですが、最後に付け加えて、寺町廃寺（三谷寺）の今後の活用や保護について一言触れておきます。実はこの看板を私は写真でしか見ておりませんが、最近寺町廃寺の入り口には、こういう看板が建っているそうでございます【スライド51】。

新聞によりますと、三次の有志の方と三良坂中学校の生徒さんたちが作られたそうですが、大変、立派な復元図が大きく描かれております。この寺町廃寺、現在は悪く言えば草ぼうぼうになっているわけですが、ぜひ、これを整備し、市民や

安芸・備後寺院跡の様相

- 寺院規模——寺域はほぼ一町四方が多い
- 伽藍配置——法起寺式配置が多いが、法隆寺式（中谷廃寺）や四天王寺式（本郷平廃寺）配置も想定できる
堂塔のみで回廊のない特異な配置もみられる
小山池廃寺——塔・金堂・講堂が東西に並列
宮の前廃寺——講堂・回廊が不明
中谷廃寺——回廊・築地がみられない
横見廃寺——東向き例のない配置
- * 基壇化粧——瓦積基壇、埴積基壇、乱石積基壇
寺町廃寺・上山手廃寺に二重基壇
- * 礎石——造り出しのある礎石と自然石の礎石

【スライド49】「安芸・備後寺院跡の様相」

寺町廃寺の伽藍復元模型



広島県立歴史博物館蔵

【スライド50】「寺町廃寺の伽藍復元模型」

百済僧弘済の三谷寺をさぐる



おわりに

史跡寺町廃寺・大当瓦窯跡の整備と保存を！！

【スライド51】「寺町廃寺の復元図看板」

県民に親しまれる歴史公園になればいいなと思っております。またこうした史跡整備を行うということになれば、当然整備に先立って寺の全体像も調査によってもっと明確にしなければなりませんから、寺跡の構造や瓦や出土品についてさまざまな成果が期待できますし、こうした調査や整備計画を早期に策定してどう実行に移すかというのが、今後の大きな課題と考えております。

4 おわりに―寺町廃寺は三谷寺―

私は、これまでの調査成果や状況から総合的に考えて、寺町廃寺が三谷寺だということを強く主張してきておりますが、地元の研究者の方などを中心に、いやいやそう断言できないのではないかという意見もございます。これには少し反論しておきますが、三谷郡には寺町廃寺と上山手廃寺があるので、三谷寺を寺町廃寺に限定せず、上山手廃寺が三谷寺でもいいじゃないかという考え方です。私は、これは少し違うのではないかと考えておまして、つまり寺町廃寺は奈良時代以前の白鳳期から平安時代までかなり長い間存続しておりますが、上山手廃寺は、その存続期間が大変短く、また寺町廃寺のような立派な塔も確認されておられません。こうした存続年代や寺の構造そのものにも大きな違いがありますし、『日本霊異記』に記された西暦663年の白村江の戦いに関連する地方寺院としても古いお寺は、やはり寺町廃寺を措いてないのではないかと思います。私は、上山手廃寺は寺町廃寺が三谷寺として建てられた後に、何らかの理由でそれを補完する寺院としてつくられたということはある得ない話でないと思っておりますが、上山手廃寺が寺町廃寺に先行して三谷寺として郡を代表するお寺であったとは到底考えられないと思っております。また、岡山の栢寺廃寺には寺町廃寺の創建時の瓦と同じものがあり、細かく比較すると寺町廃寺のものより栢寺廃寺の瓦の方が古く作られている。そうすると『日本霊異記』の物語の本当の舞台は、備後の三谷寺より備中の栢寺廃寺ではないか、といった意見もあります。

こうした異論や批判に応え、寺町廃寺が『日本霊異記』に登場する三谷寺であるということを証明するには、先ほどの明官地廃寺の寺名の書かれた平瓦のように、三谷

寺と書かれた瓦などが寺町廃寺から出てくれば、解決すると思いますが、今のところはそうした決定的な出土品はありません。私は、寺町廃寺を全面的に発掘調査すれば、「三谷寺…」などと書かれた木札（木簡）などが出てくるのではないかと期待しております。

以上のような、私の「寺町廃寺は三谷寺」という説に対する様々な批判に、今のところ明確な論文などの著作で答えておりませんが、これらのことについて、何らかの方法で私なりの考え方を整理しておきたいと思っています。

大変長くなりましたが、これで私のお話は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

主な引用・参考（図版出典）文献

- 『日本霊異記』上巻（日本古典文学大系 岩波書店刊）
後藤陽一『広島県の歴史』（1972 山川出版）
『明官地廃寺跡』第3次概報（1990 広島県立埋蔵文化財センター）
『原始・古代の広島県』（1981. 3 広島県立歴史民俗資料館）
『山王廃寺』－平成21年度調査報告書－（2011. 2 前橋市教育委員会）
各寺院跡調査概報
坪井清足『飛鳥の寺と国分寺』（「古代日本を発掘する」2 1985. 9 岩波書店）
『渡来人の寺』－檜隈寺と坂田寺－（1983. 4 飛鳥資料館）
『史跡宮の前廃寺跡』－調査と整備－（1977. 3 福山市教委）
『河内古代寺院巡礼』（2007. 4 大阪府立地近つ飛鳥博物館）
『腰浜廃寺』（1965. 6 福島市史編纂準備委員会）
『近江の古代寺院』（1989. 5 近江の古代寺院刊行会）
『河内古代寺院巡礼』（2007. 4 大阪府立地近つ飛鳥博物館）
加島勝『柄後香炉と水瓶』（「日本の美術」NO.540 至文堂）
『世界陶磁全集』11 隋・唐（1976. 3 小学館）
『古代の出雲と吉備の名宝』（2009. 10 広島県立歴史民俗資料館）
松下正司「水切瓦再考」（『考古論集』 1993. 3 潮見浩先生退官記念論文集）
『寺町廃寺と水切り瓦』（1998. 4 広島県立歴史民俗資料館）